

「学校ボランティア」13年の歩み

入江 直子
齋藤 元
大場 裕二

<目次>

はじめに	177
I. 「学校ボランティアの始まり」から量的拡大へ (2004～2009)	178
1. 学校からの要望への対応 (2004～2006)	
2. 教職課程としての積極的な展開 (2007～2009)	
(1) ボランティア先の開拓と「学校ボランティア報告会」・「学校ボランティア情報交流会」	
(2) 授業「学校ボランティア演習」の開設	
(3) 授業の充実と「学校ボランティア相談会」	
II. JYSP (神大・ユースサポート・プロジェクト) の始まり (2010～)	180
1. JYSPの開始と地域への展開 (2010)	
(1) 「学校ボランティア」―「神中ブロック」をモデルとした包括的支援プロジェクト	
(2) 外国につながる子どもの支援プロジェクト	
(3) 「青少年の居場所」プロジェクト	
2. JYSPの活動による地域貢献と行政との連携 (2011～)	
(1) 「学生にとっての学び」が「大学としての地域貢献」へ	
(2) 「学校ボランティア～教育実習」による学校・教育委員会との連携	
3. 外国につながる子どもの学習支援「JINDAIのびのび楽習塾」(2011.1～)	
(1) 横浜市における「外国につながる子ども」への学習支援の状況	
(2) 「JINDAIのびのび楽習塾」の発足 (2010)	
(3) 活動の発展 (2011)	
(4) 隔週開催から毎週開催へ (2012)	
(5) 世代交代による新たな模索 (2013)	
4. JYSPにおける「活動のふり返りによる学び」を支える仕組みの形成	
(1) 授業「学校ボランティア演習」と「学校ボランティア通信」	
① 「学校ボランティア演習」の授業	
② 「学校ボランティア通信」	
(2) 学生スタッフの「コーディネーター・コミュニティ」	

III. JYSP (神大・ユースサポート・プロジェクト) の展開 (2013～)	189
1. 新たな取り組み「JIN-KANA学習塾」	
(1) 「困難を抱える青少年の進路選択支援事業」の展開	
(2) 1年目の状況 (2013)	
① 手探りの準備	
② 取り組みの中で学生が得たこと	
(3) 「社会貢献活動」としての評価 (2015)	
(4) 「ワーカーと学生の夏期合同研修会」 (2015)	
(5) 「中学3年生」から「中学1・2年生」にも拡大 (2015～)	
2. 学校ボランティア先の「若手教員と語る会」 (2014～)	
3. 活動のふり返りの深化をめざして～「カンファレンス」の試み (2016)	
IV. 学習アドバイザーとして関わって.....	195
1. 活動のふり返りを通して学ぶ「カンファレンス」の取り組み	
2. JIN-KANA学習塾に関わって	
資料	208

- 資料① 「学校ボランティア」13年の歩み (年表)
- 資料② 「JINDAIのびのび楽学習塾」
- 資料③ コーディネーターグループとしての学生スタッフの役割
- 資料④-1 JYSP BULLETIN創刊号 (2010.11.4)
- 資料④-2 JYSP BULLETIN第2号 (2011.1.1)
- 資料④-3 JYSP BULLETIN第3号 (2011.3.1)
- 資料④-4 JYSP BULLETIN第4号 (2011.7.1)
- 資料④-5 JYSP BULLETIN第5号 (2011.10.1)

はじめに

中央教育審議会は、2015年12月、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」を答申し、「教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることができない」という学校を取り巻く環境変化の中で、「教員の養成・採用・研修の一体的改革を推し進めるべきである」と述べている。そして、教員養成に関する改革の具体的な方向性の一つに、「実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させることが必要である」として、「学校における諸活動を体験させるための学校インターンシップや学校ボランティアの導入」が提案されている。

ここで示されている「学校インターンシップや学校ボランティア」に関しては、神奈川大学教職課程は、「学校ボランティア活動」の展開と「学校ボランティア演習」の授業による「実践的指導力の基礎の育成」をめざす取り組み（JYSP＝神大・ユースサポート・プロジェクト）をすすめてきた。この「学校ボランティア」＝JYSPの取り組みは、文科省の実地視察（2011年）において評価され、また、大学基準協会の認証評価（2015年）においても高い評価を受けた。本稿では、神奈川大学（横浜キャンパス）教職課程における「学校ボランティア」の歩みを報告する。

教職課程が「学校ボランティア」の取り組みを始めたのは2004年度であった。それまで、教職課程の非常勤講師である元横浜市立中学校長の高橋耕文先生から、小中学校の宿泊体験学習のボランティアを授業で紹介され、単発で関わっていた学生はいた。また2003年度には、工学部4年生で横浜市の中学の数学教員を希望

する学生が、学校ボランティアを紹介してほしいと申し出て、大学近隣の松本中学校の個別支援学級のボランティアに週1～2日通い続け、教員採用試験に合格することができた。

このように、学校ボランティアに対する学校からの要望と学生の関心が広がりつつあった2004年度に、高橋先生から、浅間台小学校に赴任された両角英之校長の学生ボランティアに対する要望が伝えられた。ここから神奈川大学教職課程の「学校ボランティア」が始まったのである。

本稿では、2004－2016年の13年間の学校ボランティアの歩みを報告するが、その歩みは大きく3つの時期に分けられる。第1期（2004－2009年度）は、学校からの要望と学生の関心の広がりによって、活動先の学校と活動する学生の数が増加した時期で、1校3人から始まって、12校50人にまで増えた量的拡大の時期である。

第2期（2010－2012年度）は、神奈川大学が横浜市こども青少年局から「困難を抱える青少年の進路選択支援事業」の委託を受けて、「神大・ユースサポート・プロジェクト」（JYSP）を立ち上げ、「学校ボランティア」を中心に、地域を視野に入れた活動を展開した時期であり、量的拡大と、活動の発展と深化の時期である。この時期の特徴は、事業を受託したことで職員と学生アルバイトを雇用することができ、そのサポートによって学生のボランティア活動が定着し、「学生の学び」が広がり深まったことである。

第3期（2013－2016年度）は、神奈川大学が神奈川区役所から委託を受け、「生活困窮家庭の中学生の学習支援」に取り組むようになった時期であり、活動の多様化と定着の時期である。前期に引き続いて「学生の活動と学び」をサポートする体制として、職員と学生アルバイ

トに「学習アドバイザー」(元教員)を加えることができ、さらに「学生の学び」が広がり深まっている。

以上のように、神奈川大学教職課程が「学校ボランティア」に取り組んできたのは、「学校

における諸活動の体験機会の充実による実践的指導力の基礎の育成」につながる「学生の学び」に価値を置くからであり、ここでは、その視点から「学校ボランティアの13年」をふり返る。

I. 「学校ボランティアの始まり」から量的拡大へ (2004～2009)⁽¹⁾

1. 学校からの要望への対応 (2004～2006)

2004年度には、学生たちに熱心に学校ボランティアをすすめていただいた高橋耕文先生が、浅間台小学校に赴任された両角英之校長からの学生ボランティアに対する要望を伝えに来学された。3人ほどの学生がボランティアを希望し、週1～2回通うことになった。

学生たちは、朝の始業前から学校に行き、教師の手伝いをしたり、子どもたちと遊んだり、落ち着かない子どもの対応をしたり、と慣れないことを一日やって、はじめはかなり疲れたようであった。しかし、慣れてくると、子どものような喜びを報告してくれるようになった。そこで、学校での経験を記録しておくように促した。浅間台小学校では、金曜日に教師たちが校内で授業を見合っ、放課後に授業研究会が行われていて、金曜日にボランティアに行く学生は、授業研究会にも参加させてもらっていた。校長が学生ボランティアを要望したのは、「学校を開く」ことに向けてということで、継続的に通っている学生ボランティアは、そのうちスタッフの一人として位置づけられ、AT(アシスタント・ティーチャー)と呼ばれていた。学生にとっては、子どもとの関わりを学べるとても貴重な機会であった。

浅間台小学校には、2004年度から始まって、その後も毎年、3～4人の学生が週1～2日、年間継続してボランティアに通った。そして毎年、その中の1～2人が小学校の教員採用試験

に合格した。神奈川大学には小学校教員養成課程がないので、小学校の教員免許は、卒業してから他大学の通信課程等で取得する者が多いが、小学校のボランティアには、そうした卒業生が多く関わるようになった。

2005年度には、浅間台小学校から紹介されて、寺尾小学校にも3人の学生がATとしてボランティアに行くようになった。その中の1人は、4～5月に子どもたちと関わった経験が、6月の教育実習と7月の採用試験の力になったという。彼は、現役で出身県の中学校社会科の教員採用試験に合格し、卒業までボランティア活動を続けて学んでいた。寺尾小学校では、特別支援教育の研究指定校として、特別支援教育を教師の連携によって取り組んでいて、ボランティアに行った学生は、その点で非常に勉強になったという。

2006年度になると、ボランティア先の小学校がもう1校増え、また中学校も増えた。浅間台小学校・寺尾小学校に加えて、寺尾小学校から紹介されて、大口台小学校にも1名行くようになった。中学校は、近隣の栗田谷中学校である。中学校では、自分の教科の授業を参観したり、授業の中で個別に支援が必要な生徒に関わったりすることが多かった。また後期になって、高橋耕文先生の紹介で、戸塚中学校の漆間浩一校長(その後、横浜市教育委員会教育次長)から要望があり、2人の学生が「保健室登校」の生徒たちの学習支援に関わるようになった。

以上が、学校からの要望に応じて学生がボランティアに行くようになった学校ボランティア

の始まりから、徐々にボランティア先と参加学生数が増加した2006年度までの活動の概略であるが、この間、教職課程として「学校ボランティア通信」を2005年度にNo.1(2006.3.7)、2006年度にNo.2(2006.7.11)、No.3(2006.9.26)、No.4(2007.2.24)と発行した。教職課程指導室でアルバイトをしながら学校ボランティアに行っている卒業生が中心になって編集したが、学校ボランティア活動の記録として、そして、ボランティア活動をしている学生には自分の活動をふり返る機会になるように作成した。

2. 教職課程としての積極的な展開 (2007～2009)

(1) ボランティア先の開拓と「学校ボランティア報告会」・「学校ボランティア情報交流会」

2006年度までは、学校から要望があった場合に学生に情報を提供し、関心がある学生がボランティア活動を経験するという動きであった。しかし、ボランティア活動に関わる学生の成長に接した教員たちは、学生が子どもとの関わり等の経験をし、そこから学ぶことでより実践的な力を獲得できる機会として、学校ボランティアの意義を実感し、2007年から教職課程として、より積極的に取り組んでいくことになった。

まず、神奈川県内の中学校数校に「ご相談とお願い」(ボランティアの「御用聞き」)に複数の教員で回って情報収集をし、年度始めに説明会を開いた。30名以上の学生が参加し、学校ボランティアに対する関心の広がりを感じたが、平日の半日～1日を継続的にボランティアに行くために確保するという時間的な都合がつかない学生も多く、結局、そのうち数人が、新たにボランティア活動を始めた。なかでも、「保健室登校」の生徒に関わる活動に対する関心は高く、前年度から継続している2名を含めて5名の学生が戸塚中学校に通った。

こうして、2007年度には、前年度から続けている学生と新たに始めた学生を合わせて、22名の学生が、7校で継続的な学校ボランティアに関わった。そこで、学校での貴重な経験をふり返って、お互いに報告し合い、そこから学ぶ機会を何とか持ちたいと思い、1ヶ月に1回、学生と教職課程の教員が共通に集まれる金曜日6限に「学校ボランティア報告会」を計画した。また、7月にはボランティア先の校長等教員の方々に参加いただき、学校と大学が情報交流をめざす「学校ボランティア情報交流会」をおこなった。なお、「学校ボランティア通信」は、No.5(2007.6.20)、No.6(2007.6.20)、No.7(2008.1.29)を発行した。

以上が、2007年度の学校ボランティアの取り組みの概略である。学生がボランティア活動を通して学ぶことができるためには、活動の中で経験したことをふり返ることが重要であり、「学校ボランティア報告会」に取り組んだが、具体的にその機会(時間)をつくるのがかなり難しかった。そこで、学生も教員もそれを日常的な取り組みとして臨んでいかれるように、2008年度に向けて授業としての位置づけを検討した。

(2) 授業「学校ボランティア演習」の開設

2008年度は、ふり返りの機会を日常的につくり出すのはかなり難しいという反省に立って、学校ボランティアを巡る取り組みを「授業」として位置づけた。授業科目は「総合演習」(2011年度からは「学校ボランティア演習」とし、I(前期)とII(後期)を金曜日6限に開講し、教職課程の教員5名関わった。正規に登録した学生は数名であったが、すでに「総合演習」履修済みの学生も参加した。学生たちは、おのおの年間を通して週に半日～1日、小学校や中学校で活動しており、月1回金曜日6限に、教員と学生全員が参加するかたちで、それぞれが学校で経験していることを報告し合い、学び合

うこととした。授業の参加人数はその時によって違ったが、小学校グループと中学校グループというように、2～3のグループに分かれて話し合いをした。より具体的なことを話題にして振り返ってみると、特に同じ学校に行っている場合には、同じ悩みを持っていたり、困ったりしていることが分かった。たとえば、1校に5人行っていても、1日に行っているのは1人ということであり、先生たちは忙しそうにしているので、何か聞くこともできないでいたのである。

そこで、せっかく経験させていただいているのであるから、その経験から問題を発見し、その問題を考えることによって学校を理解し、よりよい教育活動をめざしていられる力の形成につながるようなボランティア活動にするべきではないかと考え、前期の終りにボランティア先の先生方に参加していただく「学校ボランティア情報交流会」の折に、グループで先生たちと話し合う機会を持つ取り組みをした。

以上のように、2008年度は、継続的なボランティア活動とそのふり返りの場としての授業という取り組みを中心に、33名の学生が10校で継続的なボランティア活動に関わった。なお、学生が自らの活動をふり返った記録としての「学校ボランティア通信」は、夏休み前の「情報交流会」に向けて、7月16日にNo.8 (小学校

特集)、No.9 (戸塚中特集)、No.10 (松本中・栗田谷中・老松中編)、年度末にNo.11を発行した。

(3) 授業の充実と「学校ボランティア相談会」

学生が教員になっていくにあたって必要とされる「実践力」の形成に、学校現場での経験とそのふり返りは必須であると位置づけ、2009年度には、月1回の授業と「学校ボランティア情報交流会 (活動先の先生方に参加していただいて7月に開催)」も充実させて、41名の学生が12校で継続的な学校ボランティア活動を展開した。また、「学校ボランティア通信」は、7月の「情報交流会」に向けて、No.12 (戸塚中・六角橋中編)、No.13 (松本中特別号)、No.14 (大口台小・太尾小・白幡小バージョン) を発行した。

なお、春休み及び来年度のボランティア活動を新規の学生にも呼びかけるため、後定期試験終了時に「学校ボランティア相談会」を計画した。ボランティア先ごとの「ボランティア通信」の作成の取り組みなど、グループでの活動の展開によって、学生が自主的に活動をすすめる機会が多くなり、「相談会」も学生の自主的な動きですすめられた。

II. JYSP (神大・ユースサポート・プロジェクト) の始まり (2010～)

1. JYSPの開始と地域への展開 (2010)⁽²⁾

神奈川大学では、2010年度、横浜市こども青少年局の委託事業「平成22年度 困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業～小・中学生を中心とした生活・学習支援モデル」を受託した。事業の委託を申請するベースとなったのは、教員をめざす学生たちが2004年度より行っ

てきた「学校ボランティア活動」である。学生たちがボランティア先の学校で関わっているのが、いわゆる「困難を抱える」子どもたちであり、その子どもたちの「今」をサポートすることが、その子たちの将来の「進路選択支援」になると考え、「学校ボランティア活動」をさらに展開するという内容で事業の委託を申請することになった。

事業の推進体制としては、教員と職員による

プロジェクト推進体制を組み、教員をめざす卒業生などをアルバイト・スタッフに雇用して、学生のボランティア活動のコーディネーターやサポートをする体制を作ることにした。こうして申請した事業の受託が7月中旬に決まり、8月から事業がスタートした。

この事業を、神奈川大学では「神大・ユースサポート・プロジェクト」(JYSP)と命名し、具体的には三つのプロジェクトに取り組むことになったが、それまでの「学校ボランティア」と違う点は、それぞれのプロジェクトを「地域の課題」への取り組みとして展開しようと計画したことである。すなわち、支援する小・中学生を、学校という「点」だけではなく、地域という「面」でとらえ、学校や地域の中で、小・中学生－大学生－大人の「育ち合う関係」「育ち合うコミュニティ」を展開させていかれるような方向性をめざした。三つのプロジェクトは、2010年度は以下のようにスタートした。

(1) 「学校ボランティア」－「神中ブロック」をモデルとした包括的支援プロジェクト

教職課程では、前述したように、2004年度から大学の近隣を中心とする横浜市内の小中学校でのボランティア活動に取り組んできた。1校(3名)から始まり、2校(6名)、4校(10名)、7校(22名)、10校(33名)、12校(41名)と着実に増加し、2010年度は、12校で50名を超える学生ボランティアが活動していた。

学生たちは、週に1日(あるいは半日)朝から学校に行き、先生たちの補助をしながら、子どもたちとの関わり方を実践的に学んでいた。そこで出会うのは、さまざまな状況の中で「困難を抱える」子どもたち－授業を落ち着いて受けることが難しい、教室に入りにくい、授業についていきにくい(外国籍で日本語が分からない子どもも含む)という子どもたち－である。

学生たちにとっては、初めて出会う状況であることが多いが、目の前に子どもがいて「待っ

たなし」なので「格闘」せざるを得ない。その「格闘」を続けていながら、現場で先生たちから教えてもらったり、月に一回大学で行う学生と教員による活動のふり返りで悩みを話し合ったりする中で、子どもの状況を理解できるようになり、どのように関わったらよいか考えられるようになる。学生たちが「格闘」を続けることができるのは、「先生、来週も来てくれる？」と言ってくれる子どもたちの存在だと、彼らは言っていた。

こうした学生のボランティア活動に対して、学校側からは「とても助かっています」と感謝の言葉をいただくが、それをどのように展開させていくかについては、大学としてはそれぞれの学校にお任せの状況であった。そこで事業を受託するにあたって、学生の活動をより活発にするための大学のサポート体制を整備し、積極的にニーズを把握することをめざした。

幸い、大学の近隣の神奈川中学校・大口台小学校・白幡小学校の三校が、「神中ブロック」として小中連携の活動をすすめており、また地域の人たちが学校を支援する「学校支援地域本部」の取り組みをしていたため、その取り組みの中に加えていただいた。そして、事業スタートの8月には、小中学生が自分の将来の夢を描く助けとなるように大人がさまざまな活動を紹介する「神中ブロック・サマースクール」で、地域の人たちとも活動することができた。このように、少しずつ「学校ボランティア」の取り組みが、地域の人たちの子どもの成長を支援する活動にもつながり始め、「地域の学校」に対する「包括的な支援」を展望できる可能性が感じられるようになった。

(2) 外国につながる子どもの支援プロジェクト

横浜市では、外国籍の子どもだけではなく、日本国籍でも外国にルーツがある子どもを「外国につながる子ども」と言っている。「国際都市・横浜」では、多くの小・中学校で、「外国

につながる子どもたち」の存在は珍しくない。しかし、そうした子どもたちが日本語を習得し、学校での学習についていくことができるように支援することが課題であるにもかかわらず、学校で受け入れていくシステムが整っていないため、日本語が分からない転校生が来ると、学校はパニックになる。大学の私の研究室にSOSが来て、中国人の留学生を連れていくこともあった。

そこで、プロジェクトの一つとして、大学が位置する神奈川県内の小・中学校に在籍する「外国につながる子どもたち」の支援に取り組むことにした。秋から2～3カ月の準備期間を経て、1月22日(土)から隔週土曜日の午前中に「JINDAIのびのび楽習塾」を始めた。初日は、5名の中国出身の「生徒」と6名の日本人学生と1名の中国人留学生が楽しく勉強した。

準備期間には、スタッフが近隣の小中学校を10校ほど回って、校長先生たちのご意見をききながら計画を立て、校長会でも説明させていただいたので、宣伝や連絡などで学校の協力を得ることができ、なんとかスタートすることができた。

(3)「青少年の居場所」プロジェクト

中高生が気軽に集い、仲間や異世代との交流やさまざまな体験を行える施設を、横浜市では「青少年地域活動拠点」と位置づけ、「青少年の居場所」の取り組みをしている。神奈川県では、大学の近くの神大寺地区センターにその拠点が設置されていて、「神中ブロック・サマースクール」で出会った地域の人が運営責任者であったため、学生と相談してボランティアに行くことにした。活動内容は、地区センターでの「居場所」の提供と、近くの小学校体育館での「スポーツ活動」(フットサル)である。

「居場所」にはさまざまな中高生が遊びに来るが、教員をめざしている学生たちは、そこで「やってはいけないことをやっている」中高生

に対して、どのように接したらいいのか戸惑い、注意をしなければいけないのではないかと悩んだ。しかし、活動を始めて3カ月ほど経って、それぞれ少しずつ自分のスタンスで接することができるようになり、次のように言っていた学生もいる。

『「遊んであげている」というのではなく、『一緒に遊んでいる』というスタンスが一番いいと感じています。・・・彼らより少しの間長く生きている人生の先輩として、ロールモデルになれたらいいなと考えるようになりました。そのためには、私から自分の事について紹介していく必要があるのではないかと思います。』

これは、中学校の教員をめざしていた女子学生の言葉である。学生自身が異世代との交流の経験が少ない中で生きてきて、異質な異世代と出会って獲得した思いであるが、それを経験する環境が地域の人たちから与えられていたといえる。

2. JYSPの活動による地域貢献と行政との連携 (2011～)

(1)「学生にとっての学び」が「大学としての地域貢献」へ

以上のように、JYSPの活動を地域への展開という方向を意識してすすめたこともあって、大学の内外で、JYSPが大学の地域貢献としてとりあげられるようになった。教職課程としては、「学校ボランティア」を中心とするJYSPの取り組みは、あくまで教員をめざす学生にとっての「学び」となることが一番重要なことであるが、その「学生にとっての学び」となる活動が、「大学としての地域貢献」になるという点で、とても意味のある活動であると考えられる。JYSP 2年目の2011年は、JYSPの活動がきっかけとなって、神奈川県や横浜市との連携の動きが展開した。

まず、2011年4月26日に神奈川県役所と神奈川大学は、「地域における大学等教育活動の発展と、安心と活力のある地域社会の形成に寄与すること」を目的として、「連携推進協定」を締結し、中島三千男学長と岡田優子区長（現・横浜市教育委員会教育長）が協定書に署名した。このことによって、区内小学校長会・中学校長会や青少年地域活動拠点と関係の深い神奈川県役所区政推進課ともつながるようになり、学生のボランティア活動の地域での展開に関して協力関係を持ちやすくなった⁽³⁾。

次に、7月19日に横浜市役所広報課の事業である「市長とのぬくもりトーク」が行われた。林市長が来学され、JYSPメンバーと「ボランティア活動を通しての学び」をテーマに意見交換をおこなった。「ぬくもりトーク」に参加したメンバーは、それぞれ三つのプロジェクトに関わっている15人（直近に卒業した教員も含む）で、自分が活動を通して何を学んだかを語った。メンバーの話を聞いた市長からは、「ICTの時代で、人と人との直接の関係が希薄になってしまった今、このように愛を持って常に人と触れ合っている方々がいらっしゃることがとてもうれしく、ありがたく思います」という言葉が語られた。参加したメンバーにとっては、自分の活動の意味をふり返る機会となり、聴いている私たちにとっても、JYSPの活動が学校や地域の小・中学生との関係でどのような意味を持っているのかを考える貴重な機会となった。なお、この時のメンバーのほとんどは、現在、学校現場で教員になっている⁽⁴⁾。

（2）「学校ボランティア～教育実習」による 学校・教育委員会との連携

前述したように、2011年度の文科省の実地視察において、JYSPの活動は高い評価を得た。しかし、それと同時に「教育実習のあり方」、すなわち、ほとんど学生の母校をお願いしていること、母校のため「恩師－教え子」という関

係で指導・評価が適切に行われにくいのではないかとされる状況に対して、「母校以外での実習を半数以上にする取り組みが求められる」という指摘がされた。そこで、この指摘に対する一つの取り組みとして、一定期間（1年間）の「学校ボランティア」を条件に母校以外で教育実習を受け入れていただくことをお願いしてみることにした。何人かの校長先生たちにご意見をいただいたところ、むしろ「ボランティア活動の仕上げとしての教育実習」と、かなり積極的に考えていただけることが分かった。

2012年1月の「ボランティア演習」の授業の際に、2年生に「1年間の学校ボランティアを条件とした教育実習（母校外実習）」について説明し、希望者を募った。結果的に3名（免許教科は社会・英語・数学が1名ずつ）が希望し、それぞれ、すでにボランティアをおこなっている中学校、及び新たにボランティアをお願いする中学校、計3校に、1年間のボランティアを条件に2013年度の教育実習をお願いし、受け入れていただくことになった。

新たにボランティアからお願いした1人の学生の場合、2～3ヶ月試行期間ということで始めたが、「朝の挨拶」「帰りの報告」「生徒とのコミュニケーション」といろいろ課題があり、校長先生自ら「挨拶」「報告」の訓練をしてくださった。校長先生自ら実行していただいたこともあって、教科担当の先生だけでなく、多くの先生方が気にかけて下さり、試行期間が終了して校長先生の改めての面接で、彼はきちんと答えるべきことを答えることができ、正式に教育実習を受け入れていただけることになった。

このことも含めて、「ボランティア活動の仕上げとしての教育実習」において、「学び」をつくり出す「現場の力」を実感した。教育実習中に、3人のうち2人の研究授業を見学したが、一番印象的だったのは、2人とも「生徒とのアイコンタクト」ができていたことであった。3週間の実習期間では、「生徒とのアイコンタクト」ができる学生はほとんどいない。この2人

もコミュニケーション能力がとりたてて優れているわけではないので、1年間のボランティアとしての生徒との関係がなければ、できなかったことであろう。2人ともができていたことに会って、「現場の力」を実感したのである。

なお、この「1年間のボランティアを条件とする母校外教育実習」を実施するに当たっては、受入校と大学の間で協定書を作ることになり、その作業を進めた。こうした動きに対して横浜市教育委員会からは、大学と教育委員会の間で包括協定を締結し、その中で、具体的に各校と覚書を取り交わしていくというやり方が提案され、その方向で進めることになった。その結果、2013年5月30日、神奈川大学と横浜市教育委員会は、「連携のための包括協定」を締結し、石積勝学長と岡田優子横浜市教育委員会教育長が協定書に署名をした。そして、2012年度に1年間のボランティアをおこなった3人の学生は、2013年6月に教育実習をおこなうことができ、前述したような成果を上げることができたのである。

以上のように、「学生の学び」という大学にとって最も基本的なことが、大学の第三の使命ともいふべき「社会貢献・地域貢献」になるということをつくり出しているJYSPの取り組みによって、大学と行政（横浜市・横浜市教育委員会・神奈川区）の連携が進み、それが「神大生」が学校や地域で受け入れられる基盤となっていくという「いい循環」が作られつつあると言えよう。

3. 外国につながる子どもの学習支援「JINDAIのびのび楽習塾」(2011.1～)

以上、JYSPの取り組みによって「学校ボランティア活動」が幅広く多様に展開していった様子を述べたが、その中で、新たな取り組みとして始めた、外国につながる子どもの学習支援「のびのび楽習塾」について、ここでまとめておく。

(1) 横浜市における「外国につながる子ども」への学習支援の状況⁽⁵⁾

横浜市には外国籍の児童・生徒が2,000人ほどいるが、日本国籍でも日本語が母語ではない外国につながる児童・生徒は4,000人近くおり、その数は年々増加している(2012年5月現在)。

そのような子どもたちの日本語学習の状況について、「母語が日本語ではない、外国につながる子どもたちは来日して半年から1年ほどで、日常会話(話す、聞く)はできるようになるが、授業を理解し、読み書きが不自由なくできるようになるには5年から7年ほどかかる」と言われている(公益財団法人かながわ国際交流財団の職員の話より)。

横浜市では半年から1年の間は、日本語初期指導として、小学生には日本語講師が学校へ巡回指導にあたり、中学生は市内4か所にある日本語集中教室へ通うことができる。一つの学校に日本語指導が必要な外国籍の児童・生徒が5人以上在籍すると国際教室がひらかれ、教員が加配される(横浜市教育委員会事務局『ようこそ横浜の学校へ』2013年)。しかし、初期指導終了後の日本語学習やその他の学習支援のシステムは、一部の国際教室を持つ学校を除いては行われていない。

神奈川大学のある神奈川区には、中学校7校中1校、小学校19校中2校しか国際教室はなく(2010年度当時、2013年度は中学校1校のみ)、「のびのび楽習塾」の準備のために近隣の学校を訪問した2010年11月には、日本語初期指導後の外国につながる子どもたちへの学習支援は、国際教室以外ではほとんど行われてはいないことがわかった。

(2) 「JINDAIのびのび楽習塾」の発足(2010)

JYSPのプロジェクトの一つとして、「外国につながる子どもの支援」に取り組むことになり、2010年の秋から準備を進めた。まず、スタッ

フが近隣の小・中学校を10校ほど廻って、校長先生たちから実情をきいて計画をたてた。計画の作成を中心的に担ったのは、神大の日本語教員養成課程を修了したJYSPの学生スタッフと地域で国際交流活動に関わっているアルバイト職員であった。計画の概要は、隔週土曜日9時半から12時に、大学の教室で開催するということと、学生ボランティアがなるべく1対1で対応するというにことにした。

チラシを作成し、校長会を通じて各校に配布したところ、6名（小学生4名と中学生2名）の申し込みがあり、希望者の状況を把握するために学校へ出向き、本人、担任教員、可能であれば保護者と会い、日本語習得の状況などについて話し合いをした。6名の子どもたちのつながる国は中国、フィリピン、インドネシアなどであった。一方、学生ボランティアについては、隣の鶴見区で外国につながる子どもの学習支援を行っている「つるみ学習支援教室」でボランティアをしていた学生に声をかけ、そのつながりで2年生を中心に関心のある学生を集め、日本人学生6名と留学生1名で学習支援を行うことになり、2011年1月22日に第一回がスタートした⁽⁶⁾。

初回はまず、児童・生徒が楽しく過ごせるようにと自己紹介のゲームなどを行なった。そして、〈学習①—おやつ—学習②—日記を書く—発表〉という1日のスケジュールを決めた。この流れは、現在も変わっていない。

実際に始めてみると、学生の学習支援の力が不十分であることがわかり、学習相談（学生ボランティアが学習支援を行うための準備）のために元小学校教員にサポートをお願いすることにした。

（3）活動の発展（2011）

新年度に教職課程が行なった学校ボランティア募集の中で「のびのび楽習塾」の宣伝もしたところ、7名の学生が希望し加わった。児童・

生徒についても4月の校長会で再び募集したところ、3名の申し込みがあり、参加する子どもは9名、学生は14名になった。

隔週土曜の午前中、一人ひとりの子どもたちへの学習支援を着実にすすめるとともに、クリスマス会などのイベントにも取り組み、活動が少しずつ豊かに広がっていった。また研修として、「外国につながる子どもの現状」について、講師を呼んで学習会をした。

2011年度は以上の取り組みの中で、子どもたちと学生ボランティアの関係が深まった。

（4）隔週開催から毎週開催へ（2012）

児童・生徒にとって「土曜日は『のびのび』に来る」ことが習慣になるように、2012年5月から、「隔週開催」を「毎週開催」にした。その他の活動としてクリスマス会、研修として「外国につながる子どもたちへの指導法」についての学習会を行った。

2012年度は「のびのび楽習塾」を毎週開催し、子どもたちも「土曜日は『のびのび』に来る」ことが定着し、病気や学校行事以外で休むことはほとんどなくなった。同時に学生も子どもたちの意欲を感じ、準備としての「学習相談」も毎回積極的に行なうようになった。

（5）世代交代による新たな模索（2013）

2013年度は初期メンバーの4年生4名が卒業し、児童・生徒が10名、学生ボランティアが12名となった。後期の学校ボランティア募集の中で、学生ボランティアが4名増え、同時に中学2年生が2名増えた。

研修として、「外国につながる子どもたちの背景や支援の方法」についての学習会を行い、その他8月に、港中学校国際教室の夏休み学習教室へ学生3人が参加、国際教室での支援を学び、その後の「のびのび」での支援に活かした。2013年度は、学生たちが「児童・生徒同士の交

流ができるようにする」という目標をたて、ゲームなどのミニレクリエーションを毎月行った。その理由は、児童・生徒の中には学校で友達がいけないという者がいるので、「のびのび」でレクリエーションをし、コミュニケーションの力をつけていくことが、友達をつくる力になるのではないかということであった。

「のびのび楽習塾」が始まって、学校では自分の殻に閉じこもりがちな外国につながる子どもたちが、土曜の朝、元気に大学に通ってくる姿が習慣となり、学生が学習支援をするうえで大きな励みになった。はじめはごちなかった挨拶が、学生から自然に言葉をかけることができるようになり、学習相談で準備をすることで自信をもって教えることができるようになった。子どもたちが帰った後のふり返りの時間に学生たちは子どもたちのその日の様子を語り、困ったことなどを共有し、他者の意見を聞いて、少しでもよりよい学習支援を目指して活動を継続した。

生徒からは「高校に入ってから『のびのび楽習塾』に来てよかった」、また保護者たちからは「子どもの将来の夢の一つに神大に入っている学習支援をすることがある」「うちの子は『大きくなったら自分がしてもらったように同じような立場の子どもたちを助けてあげたい』と言っている」という言葉が伝えられたりする。これらの言葉は学生の学習支援が、子どもたちに寄り添った心の通う支援になっていると確信できる言葉である。そして、学生たちは子どもたちの笑顔を引き出し、学習への意欲へとつなげ、学習支援の体験を通して、彼らと共に成長していく。

4. JYSPにおける「活動のふり返りによる学び」を支える仕組みの形成

以上のように、2004年から10年の歩みを展開してきた学校ボランティアの取り組みは、教員をめざす学生にとって実践的な学びの場となっ

てきたが、その展開の中で「活動のふり返りによる学び」をつくり出し、支える仕組みが形成されてきた。ここで、その「仕組み」と「形成プロセス」をふり返っておく。

(1) 授業「学校ボランティア演習」と「学校ボランティア通信」

① 「学校ボランティア演習」の授業

2011年度から「学校ボランティア演習Ⅰ」(前期)・「学校ボランティア演習Ⅱ」(後期)の授業を開講している。そこに至る経緯は、以下のようなことであった。まず、教職課程として学校ボランティアに関わるようになった2007年度に、学校での活動の経験をふり返って、お互いに報告し合い、そこから学べる機会として、1ヶ月1回集まることを目標に「学校ボランティア報告会」を計画した。具体的には、学校ボランティアに行っている学生と教職課程の教員が共通に集まれる可能性のある日程として、金曜日6限を設定した。(この「金曜日6限」は、その後もずっと現在に至るまで、学校ボランティアのふり返りの機会として設定されている。)

しかし、時間割上に位置づいていないため、共通に時間を設定することがかなり難しい状況で、2008年には、学校ボランティアを「授業」として位置づけることにした。授業科目は「総合演習Ⅰ」「総合演習Ⅱ」として、金曜日6限に開講し、教職課程の教員5名関わった。学生たちは、おのおの週に半日～1日、小学校や中学校で活動し、月1回金曜日6限に、教員と学生が一堂に会し、それぞれが学校で経験していることを報告し合って、ふり返りの機会とした。「総合演習Ⅰ」「総合演習Ⅱ」は、選択必修科目であるので、すでに履修して登録できない者もいたが、登録者かどうかは問題ではなく、定期的な学校ボランティアと月1回のふり返りの授業は年間を通して継続された。

こうして、おのおのの学生が現場で経験を積

み重ね、それを授業でふり返るといふ「学校ボランティアの学びのあり方」が定着していったが、2009-2010年度は、それがさまざまな形で充実していった。例えば、1年に1～2回、ボランティア先の先生方に参加していただいて「学校ボランティア情報交流会」を開催したり、年度初めにボランティア募集をしていたものを、後期の授業開始時や春休み前の2月初旬にも「学校ボランティア相談会」を学生が自主的に行うなど、取り組みが充実した。

2011年度は、学校ボランティアの取り組みにとって、大きな展開の年になった。「困難を抱える青少年の進路選択支援事業」の受託によって、アルバイト・スタッフを雇用することができ、数名のアルバイト・スタッフによるサポート体制をとることができるようになったのである。アルバイト・スタッフは、学校ボランティアの経験があり、教員採用試験に向けて準備している卒業生であった。スタッフ自身も学校ボランティアの活動を行ないながら、学生たちの活動をサポートした。具体的には、それぞれ活動先の学校にボランティアに行きながら、その学校で活動している数名の学生たちの状況について担当の先生と確認したり、学生たちが困ったりしていることを把握して、相談にのったりする。そして、そうした活動を通して把握できる現状を持ち寄って、スタッフが授業を計画するという取り組みをした。

1ヶ月に1回の授業は、以下のように計画され、運営された。学生たちは、ボランティア活動をしたら、なるべくその日のうちに自分のノートに活動のふり返りと自分が感じたことを記録する。授業では、活動先の学校ごと、あるいは小学校・中学校の学校種ごとのグループで、ノートに書いた活動の記録に基づいて報告し合い、話し合う。授業の最後に感想を書き、その感想は、スタッフが学生たちの現状を把握する情報となり、日常的に学生たちと関わっていく際に参考にし、そこからまた授業を計画していくという循環で展開していった。

2011年度は、教員免許法の改正（2010年）にともなって、科目名が「学校ボランティア演習Ⅰ・Ⅱ」に変更された。そして、この年に確立された、「活動—ふり返り」の循環をつくり出し継続させていく授業のあり方は、その後も基本的に踏襲され、少しずつ改善しつつ続けられている。2012年度には、活動記録を各自のノートではなく、ボランティア日誌の用紙に書いて、コピーをスタッフのいる教職課程支援室に提出し、スタッフはその日誌を読んで、活動しているかどうかの確認と学生がどのような経験をしているかの把握をするようにした。そして、週1回のスタッフ・ミーティングで、それらの情報を次回の授業の計画づくりに活かしていくという流れを作っていた。

以上のように、JYSPの取り組みによって、数人のスタッフが学校ボランティア活動の把握に関わることができるようになり、その情報に基づいてスタッフ・ミーティングで授業を計画し、スタッフが授業を運営していくようになって、「活動—ふり返り」の循環をつくり出し継続させていく授業のあり方が組織的になったといえる。

② 「学校ボランティア通信」

学校ボランティア活動を行なっている学生が自分の活動記録を基に書くレポートを編集して「学校ボランティア通信」を発行している。No.1は2005年度に、その後、2006年度にNo.2～No.4、2007年度にNo.5～No.7、2008年度にNo.8～No.11、2009年度にNo.12～No.14を発行した。2005～2007年度は、教職課程支援室（当時は教職課程指導室）でアルバイトをしながら学校ボランティアに行っている卒業生が、自分も書きながら編集しているが、それぞれ貴重なふり返りの機会になっている。

2008年度からは、「学校ボランティア」を「授業」として位置づけ、月1回全員が集まりその中で、活動先ごとのグループでの話し合いが行

われるようになった。そのため、「学校ボランティア通信」も活動先の学校ごと、あるいは小学校・中学校の学校種ごとに編集されるようになった。そして、2010年度からは、年に2回、活動先の学校を1～3校ぐらいまとめて編集するようになり、通しのナンバーはつけていない⁽⁷⁾。

現在、「学校ボランティア通信」をつくるプロセスは、以下のようになっている。学生は、ボランティア活動に行った日に自分の活動をふり返って「ボランティア日誌」を書く（教職課程支援室でコピーを取り、提出する）。月1回の全体の授業の時に、日誌を参考に報告し合う。2～3ヶ月経った時点で、日誌に基づいてA4判1枚程度のレポートをまとめる。そのレポートを「通信作成グループ」（活動先1～3校ぐらい）で集まって読み合い、通信の原稿にして編集する。1～3校分編集した通信を重ねて表紙をつけ1冊にまとめて出来あがる。

こうして出来た「学校ボランティア通信」は、夏休み前などに、ボランティア先の先生方に参加していただく「ボランティア情報交流会」で学生が報告する際の資料になる。これが、学校ボランティアの授業に関わってすすめられる、4ヶ月ぐらいにわたる通信作成のプロセスであるが、夏休みをはさんで、後期からまた同じようなプロセスを展開し、年2冊の「学校ボランティア通信」が生まれている⁽⁸⁾。

以上、「学校ボランティア演習」の授業の展開と「学校ボランティア通信」作成のプロセスを述べたが、授業の展開と通信の作成がどのように関連して学生の学びをつくり出しているのだろうか。そのプロセスをたどってみる。

学生は、ボランティア活動を行なって、その活動と気づいたことをふり返って「日誌」を書く。授業では、それに基づいて、活動を通して学んだことについて語り合う。そして、活動のふり返りと仲間との語り合いに基づいてレポートをまとめる。レポートを読み合い、通信としてほかの人に伝わるように修正をし、編集をする。こうして編集した通信を資料に、授業の中

で活動先が違う者同士のグループでの「ミニ・ラウンド・テーブル」で報告し、さらにボランティア先の先生方に「ボランティア情報交流会」で報告する。

以上のプロセスを4ヶ月ぐらいでたどるのであるが、それぞれの節目で、語る相手が広がり、そのためにそれ以前の活動やレポートをふり返ることになり、それが「学び」をつくり出していると思われる。まずボランティア先が同じ仲間自分の活動のふり返りを語り、次に「通信作成グループ」に向けて活動のレポートを書くために仲間との語り合いをふり返り、さらに、「授業」の外に向けて通信として出していくために、レポートを「通信作成グループ」で読み合って検討するという、それぞれの節目での「学び」がつくり出されている。その「学び」をつくり出している活動が「通信づくり」であり、その活動を支える人間関係をつくり出しているのが「授業」なのである。

(2) 学生スタッフの「コーディネーター・コミュニティ」⁽⁹⁾

「学校ボランティア」の取り組みは、2010年度に横浜市子ども青少年局の委託事業を受託し、JYSPとして活動するようになってから、大きく展開した。「学生の学び」にとって、一番大きな影響を与えたのは、事業の中で雇用されるようになった学生スタッフであった。2011年度は4名のアルバイト・スタッフ（教員をめざす卒業生）を雇用した。2012年度以降は、教職課程支援室のアルバイト・スタッフが、業務の一環として、自らもボランティアに行きながら、学生の日誌を管理したり、授業を計画・運営したりして、ボランティア活動の支援をしている。

2011年度の4名のスタッフは、どのような動きをしていたのだろうか。それぞれ週1日、学校ボランティアに行き、2日大学で学生の活動のサポートに取り組んだ。具体的には、学生

がボランティアに行っているかどうか学校に行った際に把握して、行っていない場合、学生に確認するなど、学校と大学の間の情報共有を図ること、同じボランティア先の学生を昼休み等に集めて、困っていることや悩みを聞き、学生が解決できるようにサポートすることなど、学生のボランティア活動のコーディネーターの役割を果たしていた。そして、こうした役割を果たすにあたって、4人で時間を調整して相談しながらすすめていた。これが彼らと彼らのグループの力を形成したといえるであろう。

ここから、学生のボランティア活動を通しての学びをつくり出し、継続させていくためのしくみが生まれてきた。まず、それぞれの学生が自分の活動をふり返り、ノートに記録しておくこと。その記録に基づいたグループでの話し合いを通して自分のふり返りを深め、レポートを作成すること。レポートをグループで読み合っ、グループ以外にも伝わる言葉・表現を獲得すること。彼らコーディネーターは、こうしたプロセスで「通信」をつくる方法を編み出したのであるが、それは常に、学生の実態を把握し、その実態から学生が自分たちで考え合っていける方法を考えて働きかけ、その動きから次の方法をまた考え合うというプロセスで編み出していったものである。「学生が自分たちで考え

る」というところに、「学生の学び」がつけられる可能性があるのである。

2012年度以降は、「学校ボランティア」専任のアルバイト・スタッフは置かず、教職課程支援室のスタッフが、業務の一環として「学校ボランティア」のサポートに関わる体制になり、ボランティア・コーディネーターのグループは存在しなくなった。したがって、「必要に応じて」コーディネーターが集まって相談する体制はとれなくなってしまったが、教職課程支援室のスタッフ・ミーティングを週1回と定例化して、「通信」をつくり出していく「授業」をスタッフが運営している。

以上のように、「学校ボランティア」を通しての「学生の学び」をコーディネートする学生スタッフは、学生たちが「自分たちで学びあう」ことができるコミュニティを形成するサポートをしているのであるが、そのコーディネーターとしての力は、自分たちコーディネーターのコミュニティで形成されているのである。こうして、それぞれのコミュニティにおける「学び」が重なり合って、JYSPの取り組み全体が「学びあうコミュニティ」になっているといえるのではないだろうか。教職課程における「学校ボランティア10年の歩み」は、そうした方向への歩みであったと言えよう。

III. JYSP（神大・ユースサポート・プロジェクト）の展開（2013～）

1. 新たな取り組み「JIN-KANA 学習塾」

（1）「困難を抱える青少年の進路選択支援事業」の展開

2010年度に横浜市子ども青少年局の委託を受けて始まったJYSPの取り組みは、2010－2011年度と進んで、それまでの「学校ボランティア」として学校で子どもを支援するという

「点」の活動から、「地域の課題」を意識して学校や地域で子どもたちを支援するという「面」の活動に展開していった。その中で、地域に暮らす「外国につながる子ども」が学校で「困難を抱えている」という現実に出会い、2011年1月に大学で「のびのび学習塾」を始めた。当初は、隔週土曜日の午前中におこなっていたが、子どもたちが支援を必要とする現状を自覚した学生たちから毎週おこなう提案がされ、2012年5月から毎週おこなうことになった。こうした

取り組みが評価され、2012年度は、「外国につながる子どもの学習支援」がこども青少年局の助成対象となった。

2013年度には、厚生労働省の「貧困の連鎖を断ち切る」施策として進められている、生活保護世帯の中学3年生の高校受験に向けての学習支援に、神奈川県が取り組むことになり、その委託事業を受けることになった。この事業は、全国的に取り組まれているもので、横浜市内でも委託事業として実施する区が毎年増えていた。神奈川大学の場合は、「のびのび楽習塾」で学んでいる中学3年生も対象にできることになった。

生活保護世帯の中学3年生は、それ以外の中学3年生の高校(全日制)進学率が90%以上であるのに対して、全日制への進学率が50%に満たず、あとは、定時制・通信制等に進学する。「働かなければならないので定時制に進学する」のではなく、ほとんどの場合、「全日制に受からないので定時制に行く」のである。その原因は、小学生の時から家庭環境によって学習習慣がないこと、そして、家庭の経済的な事情によって「塾に行けない」ことである。そして、ようやく定時制に入学しても、卒業まで続けるには様々な努力が必要で、何らかの支援なしに一人でがんばることは並大抵ではないといわれる。こうして「高校中退」になり、「職業選択」から落ちこぼれてしまうのである。これが「貧困の連鎖」で、連鎖を「高校受験」のところで断ち切れないかというのが厚労省の施策のねらいである。まさに「困難を抱える青少年の進路選択支援事業」である。

(2) 1年目の状況 (2013)

① 手探りの準備

2013年度になって受託は決まったが、前期7月ごろまでは、区役所との調整・打ち合わせと平行して、学内の体制づくりをした。実施の日

時は、週2日、火曜と木曜の夜18:30～20:30、体制としては、契約職員を1名雇用し、JYSPの学生アルバイト・スタッフの2名をこの事業専任に位置づけた。実際に支援に関わるのは、「学校ボランティア」の活動をしている3・4年生と決め、免許教科(社会・英語・数学)毎に数名ずつ、約15名の学生に声をかけた。(区役所からは、生活保護世帯の中学3年生のうち15名ぐらいが参加を希望するであろうと言われたので、1対1の支援のために15名を目標にした)。学生は、すでに週1日学校にボランティアに出かけており、その上、週2回の夜のボランティアになるので、どのくらい引き受けてもらえるか心配であったが、何と声をかけた学生全員が、それも喜んで引き受けてくれた。今考えると、ボランティアに行っている学校で、そのような支援を必要としている生徒に出会っていたのであろうと思われる。

7月になって、中学校の夏休み明けの8月下旬に開始、その前に8月20日からトライアルとしてスタートと決め、学生主体で手探りで準備をすすめた。その間には、「生徒指導論」の非常勤講師をお願いしている元校長先生に、そうした環境に置かれている子どもたちのようすや思いについてお話を伺い、子どもたちへの向き合い方について考え合ったりした。

事業の名称を考え合い、「JIN-KANA 学習塾」と決めた。神大のマスコット「JINくん・KANAちゃん」からの発想であるが、「神大と神奈川区の協働による学習塾」という意味である。会場は、広い大学でもなかなか適切なところがなく、17号館2階の先生方の会議室が夜はほとんど使用されていないので借用している。

(毎回、開始前と終了後に机といすを移動しているが、広くて明るく、中学生にも評判がいい)。教材は、「のびのび楽習塾」で「やさしい〇〇」というような問題集などをそろえていたので、それらを利用しながら準備した。また、神大で「教科教育法(社会)」の非常勤講師をしていただいている元校長の大場裕二先生にア

ドバイザーをお願いし、教材や生徒への接し方などについて相談に乗ってもらった。こうして、みんな緊張して初日を迎えた。

② 取り組みの中で学生が得たこと⁽¹⁰⁾

初日は、生徒たちが勉強に関して必ずしもいいイメージを持ってはいないだろうと予想して、居心地がよく、また来ようと思ってもらえることを目標にして、まず生徒たちとおしゃべりすることから始めた。1対1で、それぞれの学生が細心の注意を払って対したので、生徒たちの緊張も徐々にほぐれ、1日目の終わりには、ほっとしてまた来ようと思ってもらえる雰囲気になった。こうして、生徒たちの気持ちに丁寧に向き合うことを重ねていくうちに、複数の学生が「生徒の微妙な変化に気づくことができるようになった」と自分の変化に気づいている。

通ってくる生徒の多くは、「自分は勉強ができない」「どうせ出来ない」という思いが強いので、何かできたら「ほめる」ということを大切にしたい。毎回生徒に書いてもらっている感想に、「ほめられた」という言葉がよく見られるようになった。ところが、それを「お世辞」ととる生徒もいて、「ほめられた」と実感できるには、「わかった」という達成感を感じることができた時に「ほめる」と、「ほめられる」に値する自分を実感することができ、自己肯定感を持つことができるようになると学生は気づいた。そして、生徒が達成感を感じることができるよう教材を工夫するようになった。

こうして、少しずつ自己肯定感が持てるようになるにつれて、生徒たちは「わからない」と言えるようになっていった。そして、なぜ学校の先生にわからないことを聞かないのかと聞く学生に対して、「今さら、そんなこと聞くのは恥ずかしいし、先生はいつも忙しそうだから」「今さら学校で聞いたら怒られそうなことを（ここでは）怒らずに優しく教えてくれるから、遠慮しないで安心して聞ける」と言っている。

そういう生徒たちの言葉を聞いて、学生は「生徒は皆『わかろうとしている存在』なのです。しかし、その生徒に適した学習環境が無いために、いつの間にか『わかろうとしている存在』が『わからない存在』もしくは『わかろうとしない存在』になってしまっているのではないのでしょうか」と考えるようになっていく。

『わからないこと』を遠慮しないで安心して聞ける」と生徒に言ってもらって、学生は自分の価値を感じることができ、少しでも「わかった」という自信につながられるよう取り組みを進めた。このようにJIN-KANA塾は、生徒たちにとって「安心な居場所」になったが、同時に学生たちにとっても、「教えるということ」を仲間と共に学び合える「居場所」になり。教師をめざす学生にとって、とても良い「実践的な学び」の場になったといえる。

(3) 「社会貢献活動」としての評価 (2015)

以上が、4月に受託が決まってから「手探りの準備」を経て、8月から始まった「JIN-KANA学習塾」の1年目の状況であった。そして、1期生の進路が決まり、ほとんど休む間もなく4月（実際は3月）から新3年生が入塾してきて、彼/彼女たちの課題を探りながら、またともに学習を進めていった。学生は、1週間に2日間18:30～20:30（その後1時間ほどの片付けとふり返し）と、その「1対1の学習」のための準備、そして月1回のミーティングという、それなりの時間を使って1年間活動を続けている（学生によっては、2年、3年と続ける学生もいる）。この「続ける」という行為は、敬意を払われるべきものであるが、学生にとっても「継続は力なり」で、教師に求められる基本的な「実践力」の形成につながっていると思われる。

こうして、JIN-KANA学習塾は、教師をめざす学生にとって貴重な「実践的な学び」の場となるとともに、結果として、中学生たちの「進

路選択」の支援（「定時制」も少し含まれるが、「全日制」への進学率のアップも伴って全員の進学を保障）につながって、大学の「社会貢献活動」として認められるようになった。

2015年度は、神奈川大学にとって、7年に1回の義務となっている大学基準協会による認証評価の年であった。現在、大学の役割としては「研究」「教育」「社会貢献」が求められているが、JIN-KANA学習塾にも取り組むようになったJYSP（神大・ユースサポート・プロジェクト）は、「社会貢献活動」として注目され、高い評価を受けた。さらに、学生たちに神奈川県役所より感謝状が授与され、大学内で社会活動部門の学生表彰を受けた。

（4）「ワーカーと学生の夏期合同研修会」

（2015～）

以上のように、学生は、「どうせ自分なんか・・・」という、自分自身が育ってきた経験からは理解し難い状況の中学生と出会い、中学生が安心して「わからない」と言えて、一緒に頑張っ、少しでも「わかった」という達成感を持つことができるように、手探りで取り組みを進めた。それまで周りの大人たちにきちんと見てもらえていない中学生たちは、最初、自分に自信がないため固い表情をしているが、ともかく一生懸命向き合ってくれる学生に動かされ、少しずつ学生に対する信頼感を持ち、笑顔になってきて、「勉強できるようになりたい」と頑張るようになる。

学生の力は、こうした「一生懸命向き合う」ところで一番発揮されるのであるが、なぜそれが必要な状況に中学生が置かれているのかを理解することが、よりよい支援には求められ、教員をめざしている学生であれば学ぶべきことである。そのために、JIN-KANA学習塾に通ってくる中学生の生活実態とそれが学習に及ぼす影響についての研修を計画することにし、2年目の終わり（2015年2月）に、『『貧困』がもた

らす子どもの状況」というテーマで学習会を行った。講師は、臨床心理士・社会福祉士として長く児童相談所に勤務され、神奈川大学人間科学部で「児童福祉論」の非常勤講師をされている金澤直樹先生にお願いした。学生たちは、多くの知らなかったことを知り、自分が向き合っている中学生が置かれている現実、少し思いを馳せることができるようになったと思われる。

こうして、学生は、自分たちの活動の社会的意味を少し理解することができるようになったが、学生が向き合っている一人ひとりの中学生が抱えている困難を具体的に理解できるようになるために、中学生の家庭に付き合っている区役所の保護課のワーカーさんたちと交流する機会を持てるように計画した。ワーカーさんたちに学習支援の現場を見てもらい、その後、ワーカーさんと学生が話し合えるように、学習支援を（夜ではなく）午後設定できる夏休みに「ワーカーと学生の合同研修会」（2015・2016年度）を行った。

2015年度は、8月20日（木）にワーカー16名、学生12名が参加して行った。13：00～15：00に学習支援をワーカーさんに見学してもらい、その後30分ほど「虐待と自尊感情」というテーマで金澤先生から話題提供していただいてから、ワーカーさんと学生のグループに分かれて、学生が関わっている中学生の学習の様子と変化についてレポートし、中学生の成長等について情報交流した。2016年度は、8月25日（木）に実施し、ワーカー15名、学生15名が参加した。前年と同じようなプログラムで、「子どもの貧困一子どもへの支援を考える」というテーマで金澤先生にお話していただき、その後ワーカーさんと学生のグループで話し合いをした。

このような話し合いを通して、学生は、中学生が学習支援を必要とする背景をより具体的に理解することができ、ワーカーさんは、担当している中学生が頑張っている様子やその成長を知ることができる。ワーカーさんたちは、笑顔

で一生懸命勉強している中学生を見て、その頑張りや成長をぜひ親に伝えたいと言う。その言葉を聞いて、学生は、自分の学習支援の意味を実感することができ、互いに次の一步に向かう力を得る「学び」になっている。

(5) 「中学3年生」から「中学1・2年生」にも拡大 (2015～)

JIN-KANA学習塾は、「生活保護世帯の中学3年生の高校受験に向けた学習支援」として取り組み、学生のボランティア活動である「学習支援」が、中学生の「どうせ自分なんか」を「努力するとできるようになる」「できるようになりたい」という自己肯定感に変え、高校受験の実績でも（定時制なども含み）100パーセントに達する成果を示すことができた。そうした中学生が伸びる姿に、学生たちが「もう少し早く始められれば・・・」という思いをもっていたところ、区役所から「対象学年を含めて、受益人数を増やせないか」と打診があり、「外国につながる子ども」を対象にしていた「のびのび楽習塾」（土曜日・午前）の子どもの人数が少なかったこともあって、「のびのび楽習塾」に生活保護世帯の中学1・2年生を受け入れることにした。

表1は、「のびのび楽習塾とJIN-KANA学習塾の生徒数・出席率・学生ボランティア数」

(2013年度～2016年度)である⁽¹¹⁾。

2. 学校ボランティア先の「若手教員と語る会」(2014～)⁽¹²⁾

筆者（入江）が、教員養成において「学校ボランティア」を重視しているのは、「教員養成のモデル」といわれる「教職大学院」の中でも注目されている福井大学教職大学院の「学校拠点の教員養成」というあり方が、「実践的な力」を持つ教員の養成に必要であると考えられているからである。「学校拠点の教員養成」とは、教員になる学びを学校を拠点にして展開する、すなわち学校現場での経験のふり返りによる学びを積み重ねて「実践的な力」をつけるのである。

福井大学教職大学院は、この考え方に基づく教員の力量形成の動きを全国に広げようとめざして、「学校拠点の教員養成」をテーマとする特別予算を獲得して、連携大学の取り組みに予算を含む支援をしている。本学も、「学校ボランティア」の取り組みによって学生が学校現場での力量形成をめざす取り組みに対して、予算的支援（非常勤講師1人分の報酬）を受けられることになった。そこで、実務家（元校長）の本間利夫先生に福井大学の非常勤講師（アドバイザー）として「学校ボランティア」における学生の学びの支援に関わってもらっている。

学生がATに行っている学校は8～10校あ

表1 「のびのび楽習塾・JIN-KANA学習塾の生徒数・出席率・学生ボランティア数」
(2013年度～2016年度)

年度	のびのび楽習塾			JIN-KANA学習塾			計	
	生徒数	出席率	学生数	生徒数	出席率	学生数	生徒数	学生数
2013	10		18	14		19	24 (14)	37
2014	8	88.8%	20	19	74.3%	21	27 (19)	41
2015	10 (4)	70.4%	20	15	68.9%	24	25 (19)	44
2016	12 (8)	67.4%	13	13	82.9%	16	25 (21)	29

() 内は生活保護家庭の生徒数

る。それを2～3校の「連携校」とその他の「協力校」に位置付け、アドバイザーが「連携校」に1か月に1回位、「協力校」には2～3か月に1回位、学生が活動しているところを訪問する。そして、学生と話し合ったり、可能であれば、校長等と情報交流したりしている。こうしたことが学生にフィードバックされると、学生がAT活動をふり返る助けになる。このように、アドバイザーが学生が活動している学校現場を訪問し、学生とともに活動をふり返る機会を持つことで、学生の学びは深まっていく。

その中で、アドバイザーが、日頃現場の先生となかなか話す機会のない学生の思いを察知して、「連携校」の校長に相談し、「若手現職教員と何でも語ろう会」を提案した。若手現職教員は、学生にとっては近い将来の自分のモデルであり、その若手教員と話せることは非常に興味深いことで、他の学校にボランティアに行っている学生も参加する。また、若手教員にとっては、いつも先輩ばかりの環境の中で「教えてもらおう」存在なのが、質問されて責任を持って「答える」という関係の中で、一歩成長する姿も見られるという。こうして、「若手教員と語る会」は「学生・教員が共に成長する場」として毎年続いている。

3. 活動のふり返りの深化をめざして ～「カンファレンス」の試み(2016)⁽¹³⁾

前述したように(Ⅱ-4-(1)), 2008年から学校ボランティアの「授業」を行ってきた。1か月1回行われる授業では、ボランティア先ごとのグループで語り合っ自分の活動をふり返り、それをレポートに書き、次に、ボランティア先が違う学生のグループでレポートに基づいて報告し、それを「学校ボランティア通信」にするというプロセスを半年ごとに繰り返してきた。これが、「学校ボランティア」の「ふり返りによる学び」のプロセスであった。

2013年度には、新たな取り組み「JIN-KANA

学習塾」が始まり、大学で責任をもって活動を展開するために、JYSPに「学習アドバイザー」(元校長)をお願いすることになり、2015年度からは、2名お願いしている。JIN-KANA学習塾では、週2日の活動とその後の「ミニ・ミーティング」、そして月1回の「ミーティング」(とそのためのレポート)と、密度の濃い「活動のふり返りによる学び」の定着が感じられるようになってきた。

そこで2016年度から、学校AT(アシスタント・ティーチャー)その他の活動においても「活動のふり返りによる学び」を発展させるために、「活動先ごとのふり返り」を重ね、互いの関係の深まりの中で「学び」が深まっていくように、活動先ごとの「カンファレンス」に取り組むことになった。現在、JYSPで取り組んでいるボランティア活動は、活動先ごとに数名ずつの学生がグループになっている。そのグループごとに、月に1～2回、学習アドバイザーが関わって「カンファレンス」を進めている。

グループのメンバーもそこに関わる学習アドバイザーも固定しているので、話されるテーマも発展していくようである。2016年度1年間試みて、学習アドバイザーも学習の深化を実感している。

以上、2004年度から2016年度にわたる「学校ボランティア」13年の歩みを辿ってきたが、その歩みは、社会的状況と学生の学びにとっての必要性に呼応して、「進化」し「深化」してきたと言えるのではないだろうか。

次に、JIN-KANA学習塾の始まった2013年度からと、2年後の2015年度から、JYSPにおける学生の学習支援のアドバイザーとして関わっていただいている2人の非常勤講師に、活動とそのふり返りを通しての学生の成長について書いていただく。

IV. 学習アドバイザーとして関わって

1. 活動のふり返りを通して学ぶ「カンファレンス」の取り組み

齋藤 元

(1) 学校現場で見た学生ボランティア

教員を志望する学生の実践的指導力を向上させるためには、大学の授業と教育実習だけでは不十分だということは教育に携わるものであれば誰でも思うことである。公立中学校に勤務していた時には、毎年数名の大学生が教育実習生として来ていた。実習期間は、中学校の場合は通常三週間であり、児童生徒の実態、教科指導、生徒指導などの教員としての業務、さらには学校の役割や機能、組織など現場での即戦力として必要な知識や技能のすべてを学ぶことは不可能である。ましてや、学校が抱えている様々な問題や課題を解決するために求められている「教員のチーム力」の重要性に気付いたり実感するためにはあまりにも期間が短い。

私が管理職になった頃から、勤務先の中学校に学校ボランティアを希望する学生が来るようになった。数年後には川崎市教育委員会が「教育サポーター」という有償ボランティア制度を立ち上げ、学校が希望すれば毎年2～3名の学生等が年間を通して派遣されるようになった。生徒一人一人にきめ細かな支援をしていくために積極的にボランティア学生（サポーター）を受け入れ、活動する姿を間近で見てきた。サポーター1名の活動は、授業期間中の週に1～2日だけではあるが、恒常的に人手不足である学校にとっては貴重な戦力となっていた。

また、学生の立場で見ると、現場での経験を通して学ぶことができることは想像以上に多いように思えた。派遣されてくる学生のうちほぼ全員が教員を目指しており、生徒と積極的に触れ合い、前向きに活動する者が多かった。教員たちは若い教員志望者を育てていきたいという気持ちを強め、学生の将来への期待と指導への

やりがいを感じるようになり積極的に関わるようになっていった。それらの学生の中から、何人かが教員になりたいという希望を実現させ、現在は市内の小、中、高校で活躍している。そのような経緯を見ることによって、大学生の学校現場でのボランティア活動は、学生にとっても学校にとっても非常に有益であり積極的に進めるべきだと思うようになった。

学校ボランティアは、学生自身のスキルアップや実践的指導力を身に着けることなどが主たる目的だとは思うが、教員採用試験を受験する際にもプラスになることは間違いないと思っている。かつて、市教育委員会人事採用担当として年間200人以上の受験者の面接や論文試験に携わった。多くの自治体の採用試験では、現役学生を受験者よりも臨任・非常勤講師経験者の方が合格率が高いということは周知の事実である。学校現場での経験によって教員としての実践的指導力ばかりではなく、知識・技能・意識なども向上させることができ、採用試験でそうした経験や知識を十分に生かして高い評価を得ていると思われる受験者が多くいた。

学生で高い評価を得ていた者の中では、教育実習以外に学校ボランティア等で現場での活動を体験している者が多かった。学校現場で培った知識や意識などが、模擬授業や場面指導だけではなく、面接や論文等でも発揮され高い評価を得ていると思えた。さらに、学生に接している多くの教員が採用試験前になると、論文や面接、場面指導などの練習や指導に協力する姿を見てきた。学校ボランティアの主たる目的は、教員採用試験に役立てるためではないのかもしれないが、教員を目指している学生にとってはメリットになることは間違いのない事実だと思っている。

(2) 大学で見た学生ボランティア

退職後暫くの間は、大学生と接する機会は神奈川大学の教員採用試験対策講座で臨時講師をする年に数日だけだった。1年半前に入江先生から声をかけていただき非常勤講師とJYSPの学習アドバイザーとして勤務させていただくことになってからは、学校AT(アシスタント・ティーチャー)や大学で中学生への個別学習支援をしている学生と接する機会ができた。個別学習支援を行うJIN-KANA学習塾に参加している学生とは週に二日の活動日に接することができ、一人一人の変化や成長の様子を目の当たりにすることができるようになった。

活動に参加した当初は、中学生とどのように接したり声をかけたらよいかかわからずに迷っている学生が多い。指導されている中学生も同様である。しかし、回を重ねるごとに大学生も中学生もリラックスし表情が明るくなっていき、会話もスムーズに行われるようになってくる。生徒の学習意欲も徐々に高まり、集中して学習に取り組めるようになっていく。

活動をしている間、私たち学習アドバイザーは大学生と中学生の活動状況や表情などを観察している。学生が行き詰ったり、中学生がどうしても理解できずに困っているようなときには、双方にアドバイスをしたり直接指導することもある。毎回活動終了後には、「ミニミーティング」と称する振り返りや情報共有のための会議を行っている。そこで私たちは、学生全体に対してのアドバイスや指導を行うこともある。そのような活動や振り返りを積み重ねていくことによって、学生は学習指導だけではなく、生徒指導や生徒理解、コミュニケーションの取り方などを学び、実践的な知識や指導力を確実に高めていく。

多くの学生が、実際に中学生に接し学習指導やコミュニケーションを図ることによって、多くのことを学びながら成長していくことを実感できた。授業や書籍からだけでは学ぶことがで

きない実践的指導力を確実に学んでいる学生の様子を見ることができるのは、私たちにとって喜びでありやりがいでもある。しかし、残念ながら個別学習支援以外のボランティア活動をしている学生と接する機会はほとんどなく、変化や成長の様子を直接見聞きすることはできなかった。

(3) カンファレンスで見えてくる学生の成長

① カンファレンスの始まり (2016年度)

今年度からは、個別学習支援のボランティア活動をしている学生だけではなく、教育ボランティア活動(学校AT、青少年の居場所、小学校土曜塾、小学校外国語活動サポーター)に関わっている学生が参加するカンファレンスを行うことになった。グループワークを中心に活動の振り返りを行うために、活動場所や内容が共通である学生が、原則として5~6名でグループを編成することになった。私は、松本中学校、川崎市立中学校、小学校外国語活動、戸塚高校定時制で学校AT的な活動をしているグループを担当することになった。現在参加している学生は、松本中6名、川崎市立中6名、小学校5名、戸塚高2名であるが、各グループごとに私を含めて全員が都合の良い時に行うことにした。全員の授業の空き時間が共通していたのは1グループだけで、他のグループは昼休みに行うことにした。

カンファレンスは月に1~2回行ってきたが、昼休みだと昼食を取りながらになってしまい、時間を十分に取ることができなかった場合が多かった。それでも、前回以降の活動について全員が一人ずつ振り返りを発表するようにし、時間があれば私もできるだけ一人ひとりにアドバイスやコメントを述べるようにしてきた。また、他の学生から質問や感想などを言うように促してきたこともあり、徐々に充実したグループワークになってきて、想像していた以

上に学生一人ひとりの変化や成長の様子を把握することができるようになったことが大きな収穫であり楽しみにもなっている。

② 学生の成長の様子

小学校と中学校でATを経験したAさんの活動報告レポートには次のようなことが書いてあった。「中学生や高校生とは違って、わからないことが一つでもあると児童たちの顔は引きつり、とても不安そうにします。児童の表情を見れば理解度がすぐにわかることが多いように思います。中学生や高校生はわからないことを隠そうとするので、表情にあまり出さないことが多いと感じます」。子どもは、思春期に近づくにつれて自我が確立されるようになり、できないことや失敗することを恥ずかしいと思う気持ちが強くなるということを実感しており、小学生は自分の気持ちを素直に出すが、中・高校生になると本音を出さなかったり言わなくなってくるということに気付いている。知り合いの小学校の教員から「小学校教員の楽しさは、子どもの反応がストレートで素直なことです」と聞いたことがある。Aさんは、校種の違う学校での経験によって年齢による発達状況の違いを的確に理解することができている。

同様な活動経験をしたBさんは、「高校で教えるためには、小・中学校でどのような授業をしているか文部科学省のホームページで調べたり知り合いの教員などに聞けば表面上は理解できる。だが実際に生徒の反応や理解度、活動の充実度など、目で見て体験してわかることも多くある。そのような体験をしているだけでも、高校での授業づくりに役立てていけるものがあると考えている。」と書いている。彼らが将来現場に立った時に、そうした経験を通して学んだことが授業や生徒理解などで役に立つときがあるに違いないと思うとともに、教員をめざしている学生は、できるだけ複数の校種や活動内容のボランティア活動をするべきだと思った。

臨機応変な指導と生徒やクラスによって異なる指導をする必要があることに気付いている学生もいる。小学校外国語活動と普通授業でのATをしているCさんは、「今学期、特に印象に残ったことは、先生方の児童を理解した授業づくりの力です。児童の求めている面白い授業づくりへの工夫、どのような指示を出すと活動がスムーズにできるか、何を優先して教えるべきかの判断など、児童をしっかりと理解しているからこそ行うことができる授業だと感じる場面がたくさんありました。」「児童は何を必要としているのか瞬時に見極めて与えることができる、授業を充実したものにするのだと感じました。あらかじめ児童を想定した授業づくりも大切ですが、実際にやってみてその時の児童を見ながら、臨機応変に対応していく力も大切だと改めて感じました。」などと書いている。授業をする前に児童の現状を理解した上で授業計画を立てることが大切であるということだけではなく、授業をする際には計画に固執することなく、児童の反応や理解状況などに臨機応変に対応しながら進めていく柔軟さが大切であるということに気付いている。それは、最近若い教員や教員をめざす学生に求められている実践的指導力の意味と大切さについて自ら理解したということになる。

小学校と高校でATをしているDさんは、高校での振り返りの中で次のように書いている。「1学年は5クラスあり、私はそのうち2クラスに入っている。クラスごとに雰囲気はかなり異なると感じる。1つ目のクラスは、とても元気がよくこちらが指名せずとも生徒が自発的に発言することが多い。そのためどのようなことに興味があるのか、どんなことを知っているのかわかりやすい。もう一方のクラスの生徒は、落ち着いていて話をじっくり聞いていることが多い。指名して答えを求めると授業の進みが早いと感じる。文化に関する問題よりも文法の問題のほうが得意な様子である。問題プリントを渡してもほとんどの生徒がすぐに解き終わる。」

「クラスによって雰囲気や得意なことが異なることがわかる。もちろん、生徒ごとにも違うと思うが、クラス全体の特徴をつかんでおくことも大切だと思った。」生徒に合わせた授業計画を立て、生徒一人ひとりの違いを理解した上で授業を進めていくことも大切であるが、クラスによる違いや差を把握して上で臨機応変な対応をする進め方をしていくことも大切だということに気付いている。

教育実習生が、同じ学年の何クラスかを担当して授業を行うと、同じ内容を同じ指導計画通りに授業を進めていこうとしてもクラスによって反応や理解度が異なり戸惑うことがよくある。同じクラスでも日によって反応や雰囲気、意欲などが異なることに戸惑うこともある。学校ATを経験することによって、現場で日常的にみられるそのような様々な変化に気付き、どのように対応していくべきか考えながら授業を進めることができるようになったことは大きな成長である。カンファレンスでの発言や表情からも自信を持つようになったことが感じられ、ボランティア活動を通して大きく変わることができた一人だと言える。

中には1年生で学校ATを希望してきて以来約2年間活動を続けてきて、効果的な学習指導や生徒指導をしていくためには日頃のコミュニケーションと人間関係作りが必要であることを理解し、実践することができるようになった学生もいる。彼は、活動当初は中学生とうまくコミュニケーションを取ることができずに悩んでいた。何度か相談やアドバイスをしたことがあった。その頃は、自信がなく口ごもるような話し方をしていた。しかし、最近では自信も意欲も格段に向上し、活動について明るく楽しそうに話すようになり、中学校の先生方からも成長の様子を伺うことができるようになった。

おわりに

この2年間、ボランティア活動に参加してい

る学生に接することによって、多くの学生が活動を通して成長をする姿を見ることができ、現場での経験が実践的指導力を身に付けるためだけでなく、意欲や自信を向上させ、教職の適正を見極めるためにも役立つということを確認することができた。

さらに今年度は、JIN-KANA学習塾で個別の学習支援をしている学生だけではなく、カンファレンスによって学校ATをしている学生と定期的に接することもでき、活動内容や場所によって身に付く知識や技能が違うことにも気づいた。個別の学習支援では、生徒一人一人の学力や個性に応じた指導、コミュニケーション能力、生徒理解などの知識や技能について学び、成長することができた学生が多かった。また、学校ATでは、一斉授業での学習指導、生徒指導、特別支援教育、不登校生徒対応などの理解や指導について学ぶことができており、教員同士の連携と学校のチーム力の大切さや効果についての的確に学ぶことができた学生も数名いた。それらは、学校現場ですぐに必要なとされる知識や技能であるが、実践で生かせる知識や技能へ高めていくためには、個別の学習支援と学校ATのように、幅広い経験ができる複数の異なるボランティア活動を一定期間行うことが必要だと思う。今後、教員をめざす学生たちができるだけ多くのボランティア活動を経験し、即戦力となる教員として現場で活躍する日が来ることを期待している。

2. JIN-KANA 学習塾に関わって

大場 裕二

はじめに

私はJIN-KANA学習塾（以下「JIN-KANA」と表記）が2013年8月末に発足した当初から、入江先生からお声掛けをいただいて学生とともに中学3年生への学習支援にあたっている。

中学生はその発達段階から心の中に様々な課題を抱えてながら成長している。葛藤しながら成長し続けている。さらに、JIN-KANAに参加する生徒は、家庭環境など本人自らが解決できない課題を抱えていることが多い。このような環境にある生徒を対象にすることで、学習支援も単純に学習だけの支援に終わらない可能性もある。

そこで、JIN-KANAが発足する前の夏季休業中に学生とともに具体的に「何をすればいいのか」「どのようなことに気をつければいいのか」などについて数回にわたって研修会を開き、共通理解を図った。その中で、

- ①学習の場であること
- ②原則として個別学習を実施すること
- ③学習時の座り方に注意を払うこと
- ④生徒の話聞く（受け止める）こと
- ⑤生徒の学習状況を判断しながら学習内容を決めて行うこと
- ⑥高校入学試験に合格することを目標にすること

などを基本としてスタートした。所謂「生徒指導」、「進路指導」は行わない（行えない）ことも確認した。

JIN-KANAスタート後も、学習終了後の打合せ、研修会やミーティング等を開催し、情報共有や課題解決に向けての取り組みを行うようにしてきた。また、学生は振り返りとしてレポートを書き、それをもとに学校ボランティアを行っている学生とともに行う報告会で発表をしている。

（1）JIN-KANAのスタート

学習支援を通して学力向上を図り、それを学習成績に反映させていくことがJIN-KANAの第一の目的である。学力は単純に右肩上がりでもアップしていくものではない。上がったりがったり、それを繰り返しながら全体として伸びていく。このようにして学力が伸びるには、学習を継続的に繰り返して行うことが必要である。成果がなかなか出なくても繰り返して学習していくには、教員への信頼関係が成立しているかどうか大きな要素になる。

そこで、JIN-KANAでは生徒から十分に話を聞くことに徹することを大事にしてきた。話をしっかり聞き、受け止めることができると生徒には安心感が生まれる。聞くことで生徒理解も深まる。学生にも生徒に対する思いが深まってくる。学生が生徒に正面から向き合っていくことで、生徒自身が自分を見つめ、将来をも考えていくようになってくる。

学習は、生徒と一対一の個別学習で行うことを原則としている。そこでは、机を挟んで真向いの坐るのではなく、90°の位置、あるいは横並びに座ることを基本にした。生徒の話聞くことを意識した環境づくりである。

学習内容は基本的には入学試験教科である数学、英語を中心にするようにした。生徒の学習成績や希望にも応じて、他教科の学習も取り入れている。その際、何を学習するのかを生徒と確認しながら決めていくことが大切になる。例えば、学校の提出物を出していない生徒にはJIN-KANAで提出物を完成できるようにしたり、帰国生徒であれば国語の読み書きなどを中心に学習したりするようにした。そうすると、生徒一人ひとりに合わせた適切な教材が必要になってくる。学生はできるだけ工夫して教材を作成するようになる。JIN-KANAが始まる前

の時間に学生は一室に集まり、この生徒には「こういう教材を作ったけれど」「私はこういう風に作った」と自然な形で話し合いをしながら教材を作成していた。これが一人ひとりの学生のよりよい工夫につながっていった。学生は生徒を想定しての教材開発の工夫は貴重な体験になったと思う。

(2) 生徒の学び

4年目に入ったJIN-KANA、学生は様々な取り組みを工夫している。毎年、改善を加えて少しずつ取り組みに変化が生まれている。その一つに、出席した生徒がコメントシートを提出することがあげられる。毎回生徒自身が学習したことを振り返り、次の学習内容を確認することを目的としている。当初は「感想文」と呼んでいたものに少しずつ改良を加えてきた。学習の終了時にコメントシートを書く作業を、学生と話しながらかけている。次の学習でやるべきことが生徒自身の中で明確になっていくことにつながっている。わずかなスペースにも文章が書けなかった生徒には、書きやすいように線を引いて「今月は2行書こう」「次は3行書くようにしよう」と徐々に書く量を増やす工夫をした学生もいる。その結果、生徒は長文が書けるようになってきた。このコメントシートは、生徒の学習意欲がより高まっていくことにつながっている。

さらに、実際にこのJIN-KANAで学んだ多くの生徒は成績を上げている。原則として中学校3年生を対象としているので、目前に迫った高校入試に向けて一生懸命学ぼうとする気持ちが当然ある。その上、個別学習で、学習内容について少しでも「分かった」「できた」と実感できる場面が増えてきたことが大きい。学生も生徒の学習状況を把握しながら必要に応じて繰り返しの学習をするなど、工夫しながら生徒と接している。次の文は、生徒が少しずつでも学習した成果を身に付けていくようすを喜ぶ学生

のレポートの一部である。(以下、学生のレポートの一部抜粋したものを四角の枠で囲んでいる。アルファベットは学生のイニシャル)

「俺は学校で一番バカだよ」とよく口にしていたHくん。今でもそう口にすることはありますが、「でも、(英語の)単語は覚えられるようになった」と続けて言います。
(T.K)

学校に提出するプリントを学生と一緒に学習することで提出できるようになった生徒もいる。解き方、答え方がわからず、宿題を提出できないままだった生徒がしっかりと提出できるようになった。これによって、成績もアップし、生徒が自信をもつようになったことも大きい。

ところで、生徒にとってJIN-KANAはどのような存在なのか。将来不安もあって高校入学に意欲を示さなかったある生徒が、学生が寄り添うことで自分の将来を見つめ、高校受験に向け意欲を示し、見事合格を果たした。そして、高校生活を報告しにJIN-KANAまで顔を出すこともあった。学生に思いを語ることでできる安心感が学習成績の向上や、自分を見つめられることにつながっている。

中学3年生になって周りの生徒も勉強を始め、本人も焦っていること、将来に向けて何をしたらいいかわからないこと、時には私だけにしか言わない不安や相談を授業中にしてくることもありました。(中略)私は居場所としてのJIN-KANA学習塾を強く意識するようになりました。(S.K)

生徒の居場所としてのJIN-KANAは学生の寄り添いによって成り立っていると言える。

学習終了時に中学生が記入するコメントシート

JIN-KANA 学習塾 2016年12月15日 木曜日

名前: _____

教科: 数学, 英語

感想・お願い・一言・今日、勉強したこと etc

数学は、平行線の計算をやりました。宿題で間違いが何個かあったので次回は満点にしたいです。

英語は、単語テスト、時刻・曜日とわかる文をやりました。
と、「何」とわかる文
単語テストは、110点外で出ました。次回は今日より高得点にしたいです。

次回の教科・予定

数学, 英語

JIN-KANA 学習塾 2016年12月14日 木曜日

名前: _____

教科: 英語・数学

感想・お願い・一言・今日、勉強したこと etc

・今日は、英語と数学の二教科をやりました。
・英語では、比較級 "nicer", "nest", "more", "most" を勉強しました。
・数学では、入試問題の解説をしました。
・すごく難しく、頭の痛い問題を解説するに頑張りました！

有難う
御座いました!

次回の教科・予定

数学 英語

(3) 学生の学び

教員を目指す学生を中心にしてJIN-KANAが成り立っている。生徒が学力を高め、生徒自身が抱えるそれぞれの課題に自ら打ち勝っていかうとする力を少しでもつけていくことが、このJIN-KANAの目的である。そのために学生は生徒に寄り添い、生徒とともに学んでいく。そして、目の前の課題を見出し、解決に向けて共に学んでいく姿勢を学生には身に付けてほしい。大変まじめで、気の優しい学生が多く集まっているが、目的に向かっていく力強さを少しでも身に付けてほしいと考えている。学生は教育実習で自分の理想や学んだこととのギャップを感じることもある。その意味でも、このJIN-KANAで生徒とじっくり関わり合い、生徒の思いや願いを多く聞くことができるのは大きな財産になる。しかも、生徒の成長を間近に見ることができる。例え教員になれなくても、また、教員とは別な道を選んだとしても、ここJIN-KANAでの経験は貴重なものになると確信している。

① 教科指導

これまで述べたように、学生は原則として一対一で生徒に学習支援をしている。最初は多くの学生が必死になって生徒に教えようとする。この学生の一生懸命な、真面目な取り組み姿勢は、少なくとも生徒に好影響を与えている。実際に生徒は素直に学生の説明をよく聞いている。この学生の姿勢は大変貴重なものである。とはいえ、生徒の学習意欲向上や成績向上になかなか結びつかないこともあった。

自分は生徒を中心に考えているつもりでしたが、教え方というところばかり意識してしまっていたのかもしれない。改めて生徒との接し方を考えていかなければいけないなと思いました。(M.M)

しかし、月1回のミーティングや毎回の学習の終了後に行う打ち合わせなどを通して、他学生の学習支援の在り方も参考にしようとする動きが学生の中に見えてきた。

担当の生徒が欠席した際に、ほかの学生が教えている姿を見学します。(中略) 自分の方法は「教える」という意識が強かったのだと考えられました。今後は、生徒のもっている能力を引き出し支援ができる指導方法にしていきたい。(M.M)

このように、学生は「教える」ことの難しさを実感するが、工夫することによって確実に指導法を進化させている。「教える」のではなく、生徒が「学ぶ」意識をもつようにした学習をすることによって、例えば生徒自らが説明するなど学習法で、生徒に力をつけていった。

まず、生徒に説明をさせることを増やしました。問題を解き終わったら、「どうやって考えたか説明してみて」と問いかけ、解き方を説明させることを増やしました。(S.N)

目標、到達点を示し、ドリルを効果的に取り入れたり、自分で解ける問題を繰り返したりすることで、生徒が達成感をもち自信を持てるようになった。

be動詞や疑問詞、現在進行形などの基本を、Sさんが「この問題なら解ける」と自信がつくまで、限られた時間ではあるけれども、何度も繰り返して行うことが大切だと思いました。(T.K)

また、生徒が「目標を持つ」「到達点を理解する」ことが学習への集中力を高め、効果が大きいことに学生は気付いてきている。しかし、適切な目標を設定することが簡単にはできない

生徒も多い。そこで、生徒の思い、願いを大切にしながら、生徒の目標設定の支援をする。具体的に話を聞くことで共感もしやすい。これが生徒にとって関心をもってもらっているという安心感、信頼感につながっている。生徒が「なぜ、この学習をするのか」を意識し、「これができないから（これができるようになるため）、がんばってこれをやろう。」という生徒の言葉になってくる。上記のコメントシートを毎回生徒が書くことの意味がここにもあると思う。そして、「生徒が目標をどう具体化し、それを実践していくか」を支援しようとする姿勢の学生が増えてきたと思う。

教材に工夫を加え、効果を出した学生もいる。生徒一人ひとりの学習状況やニーズを理解し、ふさわしい教材を考えるようになった。学生の思いや予定、計画に生徒を合わせるのではなく、生徒の状況に合わせて学習支援をしていくことを自覚できるようになってきた。教材開発は、教材そのものの開発とともに、提示の仕方も工夫することで効果的になることにも気付いてきた。

（基本的人権カードを作って）少し手間をかけるだけで、生徒の意欲を高めることができるのだと実感しました。（中略）教材も作り方を工夫するだけでなく、その教材の使い方も工夫しないと、教材の力を十分に発揮できないということがわかりました。（E.I）

今後、いい教材を創ったら、周囲に広げていく工夫も期待したい。さらに、ほめる場面を意図的につくることの大切さを実感してきた。生徒自身が、具体的には「できた」と思える状況が必要である。ほめることにも技術が必要である。そういったことにも、目を配ることができるようになってきた。

問題を解けなかった時は、できている過

程までは褒めます。間違えていたところは一緒に考えるようにしています。答えを教えることは簡単にできます。しかし、それは生徒の為になりません。考えて解けた時の喜びが一番自信につながると思います。

（R.N）

そのためには、一番は「褒める」ことを大切にしていこうと考えました。どこが良かったかを具体的に示し、もしできていなかったとしてもどこまで理解できているかを明確にし、わからないところをわかるようにしていくように心がけました。その結果、少しずつ「やればできる」と思うようになってきていると思います。（M.T）

学生は自分の得意とする教科、自分が獲得しようとする教員免許の教科についてだけ学習支援するのではない。生徒の学習状況によっては苦手な教科も扱う必要がある。その際、学生自身が学びながら、生徒と「共に学ぶ」、「一緒に学習する」という姿勢が大切になってくる。共に学ぶことによって、生徒も安心して学習に取り組むことにつながっていく。

② 生徒理解

学生は担当を決めて生徒に学習支援をしている。その大きな理由の一つに生徒理解がある。学習支援を通して実際に成績向上が見られたり、気持ちを聞いたりすることで生徒との信頼関係を築くことにつながっている。時間をかけて、少しずつ信頼を得ていくその過程が学生にとって貴重な体験であり、それを実感することの意味は大きい。

生徒一人ひとりにはそれぞれの背景があります。どんな困難を抱えているのか、反対にどういうことなら自信をもっているのかなど、しっかりと相手と向き合い、コ

コミュニケーションをとる中で見つけていくことの大切さをAさんと関わる中で実感しました。(M.T)

生徒の中には、進んで自分のことを話そうとする生徒もいれば、話そうとしない生徒もいる。JIN-KANAに来る生徒は話そうとしない生徒の方が多いかもしれない。本当につらい思いをしている生徒は、そのつらさを誰にも話せないことが多い。聞いても「別に」「大丈夫です」という言葉で終わってしまう。こういう生徒には「待つ」姿勢でじっくり接していく必要がある。時間をかけ、共感をもって「聞く」ことを継続することで信頼関係を築くことにつながっていく。実際、卒業間近に自分の複雑な生い立ちを学生に語った生徒もいた。この生徒は担当していた学生に絶大な信頼をおいていた。教員を目指す学生にとっては、生徒に対する接し方に自信を持ち、どのような配慮をすればよいのかを考えるうえでの貴重な体験になったと思う。

「もっとTさんと勉強したい」と心から思うようになりました。生徒との関係をつくることで、自分の姿勢も変わってくるのが分かったのです。(中略) 生徒と会話をして関係を作っていくことは、生徒だけでなく自分にとっても大切なことだと学びました。(E.I)

学生は生徒との関わりの中で自らが変わっていくことの重要さに気付き始めている。教員が変わることで生徒が成長していくことは、学校でよくみられることである。

また、生徒は、毎日同じ表情で来ることはない。毎日精神状態は違っている。学校で友人や教員ともめたり、家で母親と喧嘩をしたり、様々な理由で不機嫌なこともある。そのような表情の変化を見つけるのも大切なことである。生徒に関心をもっていれば気付くことが多い。

新たな発見もあるかもしれない。正面から生徒と向き合うことで、その生徒にふさわしい接し方を見つけることもできる。生徒を伸ばす言語技術も伸ばすことにつながっていく。

どの生徒にも関心をもち、「何とかしよう」という姿勢をもって、素直に生徒に話しかけ、生徒を受容しようとする姿勢が学生に身に付いてきている。

③ メンバーとの協働

学校教育は組織力で効果を出す。チーム力が大切である。JIN-KANAが組織をあげて、チームとしての力を発揮するには、生徒にどう向き合っていくか、どのような生徒を育成していくのか等の方向性を一致させる必要がある。メンバーそれぞれの個性・長所を生かすことで、チーム力を伸ばすことにつながっていく。チームとしての弱みを誰かが補うのではなく、メンバー一人ひとりのよさを伸ばすことでチーム力をあげていく必要がある。

そこで、JIN-KANAでは、月1回のミーティングを実施したり、毎回の学習終了後に打ち合わせを行ったりして、情報共有を図っている。生徒に関する情報や学習指導についての方法なども話し合われる。最近は、教科ごとの話し合いも行われるようになり、学習指導に関する話し合いも増えてきた。

また、夏にはキャンプ、冬には書初め大会、スポーツ大会、そして卒塾式などの行事を実施している。それぞれの行事については担当を決め、企画、運営を図っている。全員で行事を運営していく過程を経験させたいと考えている。

(4) 課題

学生の学びを積み上げていくことが難しい。学生の活動は1年強から3年間となっている。その中で、学び取ったこと、気づいたことを後輩に伝えていくことが難しい。話し合いを大切

にしながら共通理解を深め、運営を進めているにもかかわらず、前年のよさを継続し、積み重ねていくことがうまくできていない現実がある。

① 学び合う集団としての質を高めること

話し合いの時間は確保できているが、疑問や気付きを素直に出せずに解決に向けての積み重ねがなかなかできない。「自分はこうしたいんだ」という本音での意見のぶつけ合いができていない。他人の意見をきちんと受け入れ、自分の意見をそれにぶつけながら、新しいものを創っていくことが学び合うことにつながる。生徒についての関心をもっと高め、気づきを素直に発言してほしいが、うまく機能していない。それを学生自身も自覚をしている。

過去には学生の中でうまく連携がとれていなかったことが、トラブルの原因になったことが何度もあり、共に活動している者同士のコミュニケーションの必要性を強く感じています。(Y.S)

行事の運営、教科ごとの打合せ等の様々な場面を通して、学生のコミュニケーション力の向上に努めていきたい。

さらに、係活動や行事など、学生は仕事分担をしているが、分担をすると任せっぱなしになる傾向が強い。自分の分担が他の分担とどうつながるのかを考えられていない。他の分担と絡み合わないことが多い。生徒の学力を伸ばすためによりよい方法を考えたり、行事を皆が楽しむためにどうするのかを考えたりしたことを全体のものにする力をつけていきたい。組織的に動くことの重要性を理解した活動を今後期待したい。

② スムーズな新体制への移行

高校入試の合格発表後の3月、2年生の生徒が新しく入塾してくる。学生も新4年生を中心とした体制に移行していく。JINN-KANAがスタートした時は学生の間で運営などについての共通理解を図ってきた。しかし、現在は休みの期間がないまま継続して新生徒が入塾してくる。学生も4月以降に参加する者が多い。したがって、全員で時間をとって研修し、これまでの積み重ねを学習し、共通理解を図る時間がとりにくい現状がある。工夫が求められていく。

③ 幅広い学習

生徒の現状から、複数教科（できれば3教科以上）を自信をもって担当できるように学生は積極的に学習してほしい。実際に学校では、どの教科であろうと学級担任として、あるいは学年所属の教員として、補充学習にあたることが多い。特に英語・数学の学習を指導する場面は多い。教員採用試験でも一般教養として出題される。さらに、自分が獲得をめざす免許教科についても、幅広い知識があった方が教材開発がしやすくなる。そこで、読書を含め、学生には幅広い学習を望みたい。

おわりに

学生が生徒とこれほど近くで接する機会は多くはない。教員を目指す学生にはもっと積極的に参加してほしいと願っている。学部での学習や生活のためのアルバイトなどのこともあるが、ぜひとも多くの学生に参加してほしい。そして、何より生徒には安心してJIN-KANAに参加し、学力向上を実現し、目指す高校に入学し、充実した生活を送ってほしい。学生には生徒の学力を伸ばすことを通して、生徒理解を深め、よりよい教員を目指してほしい。

実際に、ここJIN-KANAで学力を伸ばし、

高校生活を充実したものにした生徒は多い。そういう生徒を一人でも増やすことを今後も大切にしていきたい。さらに、ここで活動した学生も貴重な学びを経験し、教員の第一歩を歩んでいる者もある。学校ボランティアでは学びにくい、生徒との密接なかかわりの中で得られる体験は貴重なものである。インターンシップの在り方を幅広くとらえとき、この取り組みの意義は一層深まると考えている。そういう意味で、この活動を継続し、さらに発展させていきたいと考えている。

なお、JIN-KANAに参加する生徒は神奈川県から大学に連絡が来るので、在籍校には連絡がいかない。その中で、「今日、大学に勉強しに行くんだ。」喜々として級友や教員に話す生徒もいる。その逆に、保護者の中には在籍校をはじめ、他人にJIN-KANAへの参加を知られたくないという思いをもつ場合もある。個々の事情等に十分配慮し、個人情報の扱いについては一層留意しなくてはならない。

*本稿のⅠとⅡは、入江直子『学校ボランティア』10年の歩み』（『神奈川大学 心理・教育研究論集』第35号）に加筆修正したものであり、ⅢとⅣは、「その後の3年の歩み」について書き加えたものである。なお、Ⅲは入江、Ⅳは、齋藤 元・大場裕二が執筆した。

(13)詳しくは、本稿Ⅳ－1（齋藤 元「活動のふり返りを通して学ぶ『カンファレンス』の取り組み」）参照

[注]

- (1) 2004年度から現在（2016年度）までの学校ボランティアの概略（ボランティア学校数・学生数・通信発行状況など）については、資料①の年表参照
- (2) JYSP BULLETIN 創刊号（2010.11.4）（資料④－1）
- (3) JYSP BULLETIN 第4号（2011.7.1）（資料④－4）
- (4) JYSP BULLETIN 第5号（2011.10.1）（資料④－5）
- (5) 資料②参照
- (6) JYSP BULLETIN 第2号（2011.1.1）及び第3号（2011.3.1）（資料④－2, ④－3）
- (7) その後の「学校ボランティア通信」は、活動先ごとに作成した通信をまとめて年に2回発行された（2015年度まで、2016年度は1回）。
- (8) 2005－2014年度の「通信」の合本として『学校ボランティアの軌跡』（神奈川大学横浜キャンパス教職課程）がある。なお、本論集掲載の鈴木英夫「教職課程における学校ボランティアの効用について」は、「通信」を分析したものである。
- (9) 資料②参照
- (10) 詳しくは、本稿Ⅳ－2（大場裕二「JIN-KANA 学習塾に関わって」）参照
- (11) JIN-KANA 学習塾の現場責任者である塩田勲氏（資格教育課程課）からの情報による。
- (12) 詳しくは、本論集掲載の本間利夫「学生・教員が共に成長する場を求めて」参照

資料①

「学校ボランティア」13年の歩み (年表)

	特徴ある取り組み	学校数		学生数	ボランティア通信
2004		1	浅間台小	3	
2005		2	浅間台小, 寺尾小	6	No.1
2006		5	浅間台小, 寺尾小, 大口台小, 栗田谷中, 戸塚中	10	No.2, No.3, No.4
2007	・学校ボランティア報告会 ・学校ボランティア情報交流会	7	浅間台小, 寺尾小, 大口台小, 栗田谷中, 松本中, 戸塚中	22	No.5, No.6, No.7
2008	・授業「学校ボランティア演習」	10	浅間台小, 寺尾小, 大口台小, 下末吉小, 栗田谷中, 松本中, 戸塚中, 老松中	33	No.8, No.9, No.10, No.11
2009	・学校ボランティア相談会 (ボランティア学生募集)	12	浅間台小, 大口台小, 太尾小, 白幡小, 栗田谷中, 松本中, 戸塚中, 老松中, 六角橋中	41	No.12, No.13, No.14
2010	・JYSP ①学校ボランティア ②青少年の居場所 ③のびのび楽習塾	13	神奈川中, 白幡小, 大口台小, 浅間台小, 二谷小, 栗田谷中, 松本中, 戸塚中, 老松中	44 7	No.15, No.16, No.17 No.18
2011	・JYSP ①学校ボランティア ②青少年の居場所 ③のびのび楽習塾 ・神奈川県役所と「連携推進協定」締結 ・「市長とのぬくもりトーク」	13	神奈川中, 白幡小, 大口台小, 二谷小, 神橋小, 中丸小, 汐入小, 栗田谷中, 松本中, 戸塚中, 老松中, 港中	51 5 14	「学校ボランティア通信 2011年度」 I・II・III
2012	・JYSP ①学校ボランティア ②青少年の居場所 ③のびのび楽習塾 ・「1年間の学校ボランティアを条件とした母校外実習」	14	神奈川中, 白幡小, 大口台小, 二谷小, 神橋小, 汐入小, 栗田谷中, 松本中, 六角橋中, 戸塚中, 老松中, 港中, 寛政中	41 4 15	「学校ボランティア通信」2012年7月号・2013年2月号

	特徴ある取り組み	学校数		学生数	ボランティア通信
2013	<p>・JYSP ①学校ボランティア</p> <p>②青少年の居場所 ③のびのび楽習塾 ④ JIN-KANA 学習塾 ・生活困窮家庭の中学 3年生の学習支援 ・横浜市教育委員会と「連携の ための包括協定」締結</p>	14	白幡小, 大口台小, 二谷小, 神橋小, 中丸小, 南神大 寺小, 神奈川中, 栗田谷中, 松本中, 六角橋中, 老松中, 港中, 戸塚中, 戸塚高 (定)	44 6 18 19	「学校ボランティア 通信」2013年7月 号・2014年2月号
2014	<p>・JYSP ①学校ボランティア ・若手現職教員と何でも語ろう 会 (11月, 栗田谷中)</p> <p>②青少年の居場所 ③のびのび楽習塾 ④ JIN-KANA 学習塾</p>	14	白幡小, 大口台小, 二谷小, 神橋小, 南神大寺小, 神 奈川中, 栗田谷中, 松本中, 六角橋中, 老松中, 戸塚中, 戸塚高 (定)	46 4 20 21	「学校ボランティア 通信」2014年7月 号・2015年2月号
2015	<p>・JYSP ①学校ボランティア ・現職教員と何でも語 ろう会 (2016年2月, 松本中・六角橋中)</p> <p>②青少年の居場所 ③のびのび楽習塾 ④ JIN-KANA 学習塾 ・大学基準協会の認証評価にお いて、「社会貢献活動」とし て良い評価を受ける ・神奈川区役所より感謝状授与 →学内社会活動部門の学生表 彰を受ける</p>	14	白幡小, 大口台小, 二谷小, 神橋小, 南神大寺小, 神 大寺小, 神奈川中, 栗田 谷中, 松本中, 六角橋中, 港中, 戸塚中, 戸塚高校 (定), 横浜総合高校	41 3 20 24	「学校ボランティア 通信」2015年7月 号・2016年2月号
2016	<p>・JYSP ①学校ボランティア ・ボランティア活動先 別カンファレンス ・若手現職教員と何 でも語ろう会 (11月, 栗田谷中)</p> <p>②青少年の居場所 ③のびのび楽習塾 ・生活困窮家庭の中学 1・2年の学習支援も ④ JIN-KANA 学習塾</p>	14	栗田谷中, 松本中, 六角 橋中, 神奈川中, 港中, (川崎市立)西高津中, 東 高津中, 京町中, 犬蔵中, 白幡小 (土曜塾), 齋藤分 小, 神橋小 (外国語活動), 戸塚高校 (定), 岸根高校	36 3 13 16	「学校ボランティア 通信」2017年1月 号

資料②

「JINDAIのびのび楽習塾」(大学生の外国につながる子どもへの学習支援) —2年間の展開をふり振り返り学生の学びと課題を見る— 2013. 1. 13 神大・ユースサポート・プロジェクト (JYSP) 入江直子・横田和子・吉見江利

神大ユース・サポートプロジェクト (JYSP) は

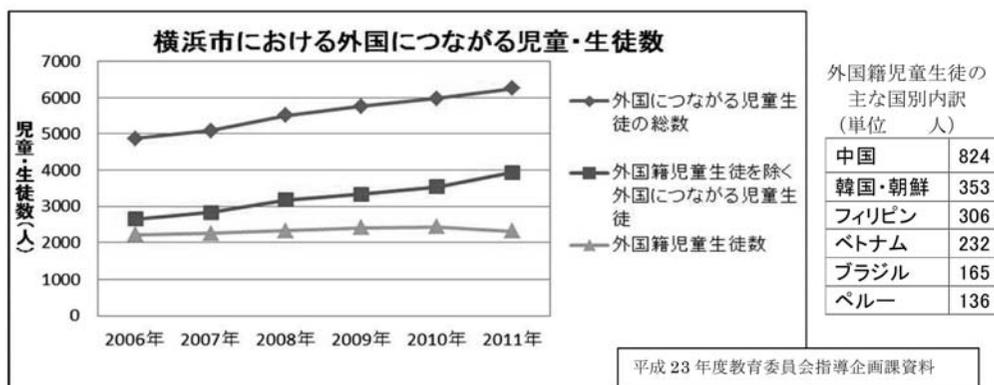
神奈川大学 (横浜) 教職課程が2010年、横浜市こども青少年局から「困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業～小・中学生を中心とした生活・学習支援モデル」を受託してとりくんでいる。

主な活動は①近隣の小・中学校14校に学校ボランティア ②地域の青少年の居場所の活動 ③「JINDAIのびのび楽習塾」
「JINDAIのびのび楽習塾」は外国につながる子どもたちの学習支援活動を行っている。



1 外国籍の子どもだけでなく、日本籍でも外国にルーツのある子ども、外国で暮らしていた子どものこと

1. 横浜市の外国につながる子どもたちの現状



横浜市の外国につながる子どもへの支援体制

- ・国際教室…日本語初期指導が必要な児童・生徒5名以上に対して、担当教員を1名配置
20名以上の場合は " 2名配置
担当教員は日本語指導、教科指導、生活適応指導等を行う。
- ・日本語教室…集中教室 (市内4カ所に設置) 子どもたちが教室へ通う。週2回 (計40～60回/年)
- ・派遣指導…日本語講師 (全市で28名) が学校へ行き日本語の初期指導をする。週1回 (計20～30回/年)

2. 「JINDAIのびのび楽習塾」の現状

《参加児童生徒 (つながる国)》 9名

小学生2名 (ガーナ、中国)、中学生7名 (中国、ガーナ、フィリピン、米国、インドネシア)

《スタッフ (支援者) 体制》 17名

職員1名、アドバイザー (学習相談) 1名、
学生ボランティア13名、社会人2名
(4年生4名、3年生5名、2年生4名)

《学習教室の様子》

- ・基本的に個別指導を行う
- ・間におやつ時間を入れ子ども同士、学生も交流
- ・日記を書いて発表する

母語、第二言語の習得の問題

「のびのび楽習塾」の中国籍の子どもの現状として、小学校低学年から中学年で来日し、1年程の日本語初期指導によって生活言語はある程度修得するが、授業を理解するための学習言語の修得が保障されていない。

在日年数が5～6年と長くても、日本語の読み書きの力はほとんど身につけていない。それに加えて母語の中国語も来日以来、学習していないため、中国語の読み書きの力もない。

アイデンティティの問題としても「母語保障」の課題も大きいのが、今後、日本で暮らしていくために第二言語としての日本語の読み書きの力をつける必要も痛感する。

3. 活動のあゆみ

2010年 11月 区内小中学校校長会で「JINDAIのびのび楽習塾」の案内をする

2011年 1月 「JINDAIのびのび楽習塾」開始、子ども6名(小学生4名、中学生…2名)

大学内の教室で隔週土曜に行う

支援者8名…(学生3名、スタッフ3名、留学生1名、社会人1名)

4月 学生ボランティア説明会実施、校長会で再度案内(子ども9名、学生14名になる)

6月 元中学校国際教室担当指導主事による学習会

8月 NPO主催のディキャンプに参加(子ども4名、学生4名)

8月 夏休み宿題セミナー実施

12月 クリスマス会、学生による人形劇

2012年 2月 《JYSP報告会》(子どもと学生が区役所関係者や近隣の学校長に活動を報告)

3月 NPO主催のJAL整備工場見学に参加、(子ども3名、学生4名)

「JINDAIのびのび楽習塾」を毎週行うことにする

(社会人2名)

5月 子ども8名、(小学生2名、中学生6名)、支援者(学生15名、スタッフ2名)

6月 港中学校国際教室担当教諭による学習会

7・8月 《港中学校国際教室の夏休み支援》(学生6名参加)

8月 夏休み宿題セミナー実施

9月 NPOと県教育委員会主催の「日本語を母語としない人たちのための高校進学ガイダンス」に参加(子どもと保護者2組)

10月 留学生(中国人)が中国籍生徒の中学校に出向き母語を含めた学習支援を開始

11月 8月にアメリカから来た生徒(母親が日本人)の日本語の読み書き支援を週3回、夜、教職課程支援室で開始

12月 クリスマス会

子どもたちが毎週来ることが定着し、学校の勉強を自主的に持参し、意欲を出す子どもも出てくる

学習の様子：個別指導



学習の様子：日記の発表



2012・12クリスマス会



現在まで、「JINDAIのびのび楽習塾」を60回開催、(2011・1～2012・3…30回、2012・4～12…30回)

4. 2年間をふりかえって(学生へのアンケートより)

活動を通しての変化

子どもの変化 支援の継続による変化

- ・継続して支援をしていくことで子どもが「楽しいから来る」から「わかることが嬉しい」「わかっていくことで自信がついてきた」に変わっている。
- ・特に2年目から毎週学習支援を継続的に行うことで、学校の状況にあわせた学習をすることができ、このことが次の勉強の動機や意欲につながっている。

学生の変化

- ・当初は日本語の支援をしたいという軽い気持ちで参加し、子どもに継続して来てもらうために楽しいイベントを計画していた。2年目に入り、毎週支援を行うことで子どもが自然と来るようになり、学習準備に力を入れ「みている子どもができるようになると嬉しい」と感じるようになる。
- ・現在中2が数名おり、1年後には高校受験を控えており、状況は厳しい。学生は「楽しく」から受験にどう対応できるかに変化。
- ・子どもの状態をみながら、これをやった方が良く自ら判断し準備しかけている。
- ・教師として必要な子どもの実態の把握など基本的なことの力不足を認識しはじめた学生もいる。

課題

- ・教えるために必要な子どもの実態把握や教える方法に関する支援学生の力不足
- ・支援の力不足や高校受験への対応という課題のための学習会の開催
- ・「JINDAIのびのび楽習塾」の支援を通して横浜市の学校での支援体制の充実の必要性を痛感した

資料③

コーディネーターグループとしての学生スタッフの役割

～JYSPの活動と学生の学びをふり返って～

2013. 12.1

神大・ユースサポート・プロジェクト (JYSP)

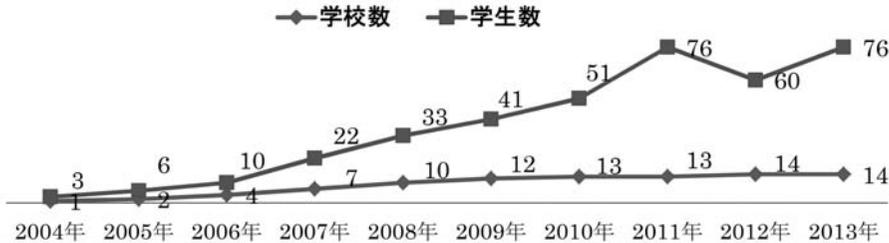
入江直子・横田和子・吉見江利

神大ユース・サポートプロジェクト (JYSP) とは (Jindai Youth Support Project)

横浜市子ども青少年局による「困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業」を受け、神奈川大学(横浜)教職課程が2010年より取り組んでいるプロジェクト。

- ① 近隣の小・中・高等学校 (14校) での学校ボランティア活動
- ② 地域の青少年の居場所活動
- ③ 「JINDAIのびのび学習塾」(外国につながる子どもたちの学習支援活動)
- ④ 「JIN-KANA 学習塾」経済的に困難を抱える生徒の高校入試への学習支援活動

学校ボランティアの学校数と学生数の推移



特徴

- ① 学校ボランティア演習(教職課程の授業)とリンク
ボランティアを行う学生は、活動後にボランティア日誌を作成し、それにもとづいて、月1回の授業(第1金曜18:00-19:30)で、グループの中で活動をふり返る
- ② 学校ボランティア演習の運営等を学生スタッフが行う
学校ボランティアの活動は2004年から始まったが、2010年からはJYSPが市の委託を受けたことにより、ボランティア経験者の学生スタッフがアルバイトとして、ボランティア活動の全般的な支援をしている

学生スタッフの役割

- ① 教職課程支援室でボランティア先の学校毎に学生のボランティア日誌を受け取り、担当の学校のボランティア活動を把握する
- ② 週1回のスタッフミーティングで学生の活動状況を共有し、学校ボランティア演習の授業を企画する
- ③ ボランティア通信作成の支援

ボランティア通信発行のプロセス＝(一人ひとりの学生が、ボランティア日誌に基づいてレポートを書き、そのレポートを学生同士が読み合い、通信の記事を作成し、編集する)

※「活動記録の書き方」について(授業のレジュメより)

その日のボランティア活動を通じて自分がどのように感じたのかを書く 例)良かったこと、失敗したことなど具体的に、なぜ失敗したのか、どうすればよいのかなど

コーディネーターグループとしてのスタッフの活動の展開と学び

2010～11年度 事業受託後、4名の学生アルバイトスタッフ、専用の部屋、スタッフミーティング
学校ボランティア演習の授業を中心に以下の動きが始まった

- ① ボランティア活動をノートに記録
- ② 記録にもとづいてレポートを提出
- ③ レポートを読み合って通信にする

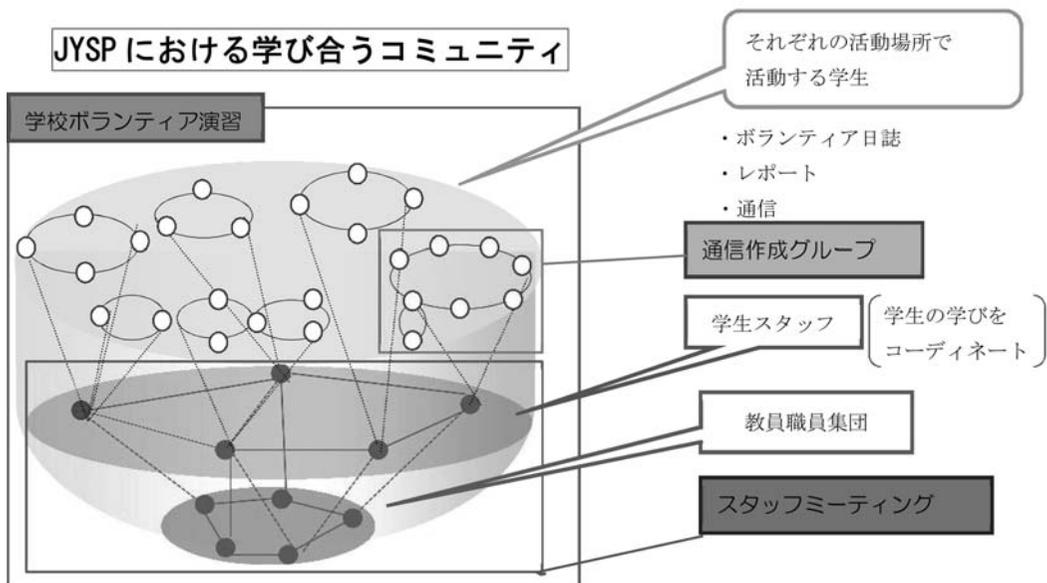
2012年度 学生アルバイトスタッフ5名（教職課程支援室のスタッフが兼ねる）

活動記録用のボランティア日誌の用紙を作成し、日誌のコピーを教職課程支援室に提出する
日誌のファイルによって、ボランティア学生との関係が深まると共に学生の活動を把握できるようになった。

2013年度 学生アルバイトスタッフ5名（教職課程支援室のスタッフが兼ねる）

学生スタッフ主体の週1回のスタッフミーティングが定着し、授業に向けて様々な工夫が生まれている

- ・一人ひとりのボランティア活動の目標を明確化する取り組み
- ・学生の悩みや意見をもとに、話し合いのテーマを設定する活動



学生スタッフのコーディネーターグループとしての学びの意味

- ◆ 学生スタッフは、それぞれ担当のグループの学生の相互の学びを作り出している
- ◆ 授業の動きを通して、半年に1度、活動をしている学校毎に学校ボランティア通信を発行するプロセスを支援している
- ◆ スタッフミーティングで担当しているグループの活動と自身のコーディネーターとしての活動を検討し合うことで、次の展開を進めている
- ◆ それが学生ボランティアの学びの支援と、自分たちのコーディネーターグループとしての成長につながっている

JYSP BULLETIN

創刊号
2010.11.4
発行

○事業概要○

「^{ジスブ}神大・ユースサポート・プロジェクト (JYSP)」は、横浜市子ども青少年局の「平成22年度 困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業～小・中学生を中心とした生活・学習支援モデル～」を受託した、学生とともに取り組むプロジェクトです。

教職をめざす学生たちの「学校ボランティア活動」を中心に、様々な理由で困難を抱える子どもたちの伴走的な支援を大きく3つのプロジェクトとして取り組みます。

① 「神中ブロック」をモデルとした包括的支援プロジェクト

神中ブロック（神奈川中・白幡小・大口台小）で、困難を抱える子どもたちを支援する「学校ボランティア活動」を展開し、「学校支援地域本部」の取り組みと連携して、包括的なネットワークを形成します。

② 「外国につながる子どもたちの支援」プロジェクト

神奈川区内の小中学校で増え始めた「外国につながる子どもたち」に対して、留学生を含む学生ボランティアが生活・学習支援を行います。

③ 「青少年の居場所」プロジェクト

「青少年地域活動拠点」（神大寺地区センター・中丸小学校体育館）の取り組みに学生ボランティアが関わります。

以上のプロジェクトに関わる者が、相互に情報を交換・共有し検証するために、**<インターネットを通じたプラットフォームの形成>**に取り組みます。

「ポートフォリオシステム」を活用して、ボランティア活動の報告やそれに対する各方面からのサポートなどの情報を蓄積します。また、地域、学校、行政、大学という子どもたちを支援する多様な主体が相互に情報交換をし、評価・検証するための仕組みを構築します。

★11月4日 キックオフを迎えて★

人間科学部 教授 入江直子



神奈川大学横浜キャンパスの教職課程では、2004年度から横浜市内の小中学校でのボランティア活動に取り組んできました。1校（3名）から始まり、2校（6名）、4校（10名）、7校（22名）、10校（33名）、12校（41名）と着実に増加し、2010年度は、12校で50名を超えています。学生たちは、週に1日（あるいは半日）朝から学校に行き、先生たちの補助をしながら、児童生徒たちとの関わりの中でさまざまなことを実践的に学ぶチャンスを与えていただいています。そして、月に1回、ボランティア学生と教員全員が集まって、活動をふり返り、さらに学びを深めています。

今回、「神大・ユースサポート・プロジェクト (JYSP)」として横浜市子ども青少年局の事業を本学が受託したことを、学校ボランティア活動が「質量ともに」豊かに発展していく契機にしたいと思っています。

学生たちがボランティア活動を通して成長し、そのことが次の世代の子どもたちの成長支援につながるよう、取り組んでいきたいと思っておりますので、先生方や地域の方たちに暖かく厳しく見守っていただきたいと願っています。

△活動の様子△

横浜市立白幡小学校には、AT4名と土曜塾に5名の学生ボランティアが活動をしています。そのうちの万江光理さんが、白幡小学校の学校便り10月号『特集ATの1日』に登場しました。その他、神中ブロックでは、大口台小学校に3名、神奈川中学校に5名と多くの神大生が活躍しています。



↑中丸小学校でのフットサル

◇Interview◇ 人間科学部4年 田中僚さん

Q1 どんな活動をしていますか？

毎週月曜日には青少年地域活動拠点の神大寺地区センターで地域の中・高校生と交流、火・金曜日には中丸小学校体育館で小・中学生とフットサルをしています。

Q2 活動は、順調ですか？

最初は、声をかけられなかったけど、一緒にフットサルをやることで話ができるようになりました。最近では、小・中学生から話しかけてくれるようになってきたので、毎回行くのが楽しみです。

Q3 最後に一言

多くの子どもたちと接することが教育現場で活かせると思うので、時間のある限り続けていきたいです。



↑白幡小学校 学校便り10月号

○ボランティア情報交換会○

月1回、異なる学校でボランティア活動をする学生たちが集まり、報告会を行っています。

報告会では、ボランティア先での活動報告や悩みや課題などを仲間と共有し、学生同士が互いに切磋琢磨して成長し続けています。



□JYSPスタッフ紹介□



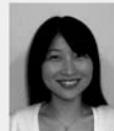
人間科学部
教授
入江直子



教務課
沖田智大



JYSP スタッフ
吉見江利



JYSP スタッフ
鈴木和佳



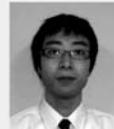
学生課
課長
千葉陽史



JYSP スタッフ
吾妻清美



JYSP スタッフ
木村正人



JYSP スタッフ
池永遼太

— JYSP事務局 —

【場所】横浜キャンパス19号館217号室
【TEL】045-481-5661 (内:4433)

【開室時間】10:00 ~ 18:00 (平日) *土日祝は閉室
【E-MAIL】jyssp-2010@kanagawa-u.ac.jp



資料④-2

第2号
2011.1.1
発行

JYSP BULLETIN

神大・ユースサポート・プロジェクト(JYSP) KICK OFF MEETING を開催しました。



2010年11月4日(木)、神奈川大学横浜キャンパスにて、「神大・ユースサポート・プロジェクト(JYSP)」KICK OFF MEETINGを開催し、横浜市子ども青少年局長、神奈川区長を始めとする行政、教育委員会、学校、地域など多くの方々にご参加いただきました。

第一部基調講演では、全日本中学校長会会長新藤久典先生に「育ち合う地域づくり」というテーマでご講演いただき、参加者の学生からは「新藤先生の熱意が伝わってきて、参加して良かった」、また本学の教職員からは「もっと多くの学生に聞かせてあげたかった」など、大変ご好評をいただきました。



同日、横浜市庁舎において、横浜市の林文子市長による記者発表が行われ、プロジェクト代表の人間科学部教授 入江直子先生が同席しました。

— 外国につながる子どもたちの支援プロジェクト —

2011年1月22日(土)から

「JINDAI のびのび 楽習塾」がスタート!

- 日時 土曜日 9:30～12:00
2011年1月22日・29日
2月19日
3月5日・19日
※2011年4月以降については、決まり次第お知らせします。
- 場所 神奈川大学 横浜キャンパス内
- 対象 神大近隣の小・中学生
(外国につながる子どもたち)

神奈川大学近隣の小・中学生(特に外国につながる子どもたち)を対象に、学校でわからないところや宿題などを、教員を目指す教職課程の学生たちが学習サポートを行います。また、外国につながる子どもたちのために、学校の勉強だけではなく日常生活の相談も受け付けます。

児童・生徒が持ってくる教科書などを使って、卒業生の教員免許取得者や日本語教員養成課程修了者及び教職課程を履修している学生が基本的に1対1で支援します。

♪詳細については JYSP 事務局までお気軽にお問い合わせください♪



活動中の学校・施設

約60人の学生が活躍

- ① ハートフルスペース都筑
- ② つるみ学習支援教室
- ③ 松本中
- ④ 栗田谷中
- ⑤ 六角橋中
- ⑥ 神奈川中
- ⑦ 菅田中
- ⑧ 白幡小
- ⑨ 大口台小
- ⑩ 斎藤分小
- ⑪ 二谷小
- ⑫ 神大寺地区センター
- ⑬ 浅間台小
- ⑭ 老松中
- ⑮ 間門小
- ⑯ 戸塚中

突撃！神奈川中学校



▲別室登校学習支援



▲部活動指導



▲A T



支援や連携で学校を開くということ

横浜市立神奈川中学校 校長 鈴木英夫



JYSPの取り組みで、神奈川中学校には、野球部の指導支援をしていただいている田中さん、中島さん、授業支援で柿沼さん、鈴木さん、池永さんという5人の方たちに支援をしていただく体制になりました。おそらくどの学校でも一番不足しているのは、施設でも予算でもなく、マンパワーだと思います。その点、神奈川中学校は神奈川大学のご支援を頂いて、ほんとうにありがたく思っています。

来て頂いている学生さんや関係者の方たちは、責任感や行動力があり、子どもたちにとっては頼もしいお兄さん、お姉さんになっていただいています。いつもは職員室のカウンセラー席を使っていますが、職員室に神奈川中学校の教員ではないけれども、神奈川中をサポートする人が毎日誰かいるということは、職員室の会話や業務の信頼性を高めるためにもたいへんありがたいことだと思っています。ボランティアとしてどのように関わっていいかご本人たちも戸惑っていることもあり、もちろん学校側もどのように関わっていただくのがいいかまだ、戸惑っている面もあります。こちらとしても改善していきたいと思っています。

時折頂くボランティア報告集からは、皆さんの真摯にボランティアに取り組んでいるきもちが感じられると同時に、学校や教職員をしっかりとっている記録になっていますので、学校が若い方たちのお手本にならないといけないということが分かり、襟をただす思いです。支援に来て頂いている方たちは、教職を目指している方や学校等でのカウンセラーを希望している方たちですので、学校としても支援していただくだけでなく、将来の横浜の子どもに関わる仕事に就く方たちなので、大切に育てていきたいと考えています。

【編集後記】初めての編集で大変でしたが、何とか完成することができました！JYSPでは、学生の活動や子どもたちの笑顔が原動力になっています。また、1月から「JINDAIのびのび学習塾」も始まり、多くの活動が広がっています。 JYSPスタッフ 池永・鈴木

JYSP事務局

【場所】横浜キャンパス19号館217号室
【TEL】045-481-5661 (内:4433)

【開室時間】10:00 ~ 18:00 (平日) *土日祝は閉室
【E-MAIL】jysp-2010@kanagawa-u.ac.jp



資料④-3

第3号
2011.3.1
発行

JYSP BULLETIN

外国につながる子どもたちの支援プロジェクト 「JINDAIのびのび楽習塾」 2011年1月22日よりスタート!

昨年10月から準備を進めてきた「JINDAIのびのび楽習塾」も、大学近隣の小・中学校から6名の児童・生徒と2名の大人が塾生として参加し、無事に3回目を終えることができました。

楽習塾の塾長である人間科学部2年上野さんを筆頭に、教職志望の学生たちが日々活発な意見交換を行い、塾生が楽しめる学習計画を立てられるよう工夫を重ねてきました。学生たちは、毎回子どもたちの笑顔に励まされながら、振り返りを行い、次の準備を行っています。



学習風景

1日のスケジュール

- 9:30 ~ 開始
個別支援
- 10:30 ~ グループ学習
- 11:30 ~ 日記
感想
- 12:00 終了

宿題や授業でわからないことを個別に支援！
学生達は子どもたちが楽しく学習できるようサポートしています。

ひなまつりが近かったので、ひなあられを入れる箱を折り紙で作りました。また、地図を使って子どもたちそれぞれの「自分の生まれた国」を紹介してもらいました。

最後に学習日記を書いて日記を発表しました。発表することでお互いを理解し、積極的にコミュニケーションが取れるようになりました。

教育研究交流会

2月5日(土) 神奈川大学横浜キャンパスにて、卒業生の教員、ボランティア学生、ボランティア先の小・中学校の先生、教職課程の教員などが集い、教育研究交流会を開催しました。

第一部では、新藤久典先生(全日本中学校長会会長)による講演、学校ボランティア活動を通じての学びの報告と活動先の先生方からの感想や学生に対する思いなどが語られ、白幡小学校と神大寺地区センター(青少年地域活動拠点)の2箇所について報告がありました。

「学び」の報告では、白幡小学校ATの人間科学部4年結城巳貴さんより高木先生のクラスでの一年間の活動についての振り返りが行われ、「児童の心の成長」について語る結城さんの姿に高木先生が涙するという場面もありました。

また、人間科学部3年の近藤桃子さんによる神大寺地区センターでの活動についての報告では、困難を抱える青少年との交流を通じ、「『生きたロールモデル』として彼らに少しでも良い刺激を与えたい。そして、年の近い先輩として、よき理解者として共に成長し合いたい」という思いが語られました。



▲交流会での様子



▲ラウンドテーブル

白幡小学校・大口台小学校
(神中ブロック)の
活動紹介

活動についてインタビュー!!

大口台小学校

法学部 3年 青木利成さん

子どもたちの目線に立ってサポートできる様、常に気を配りました。子どもたちから「先生!」と呼ばれるととても嬉しくてやりがいを感じます。最初の頃は、一人を見るのが精一杯でしたが、最近はクラス全体に目が行き届くようになりました。これからもコミュニケーションを大切に、子どもたちとの距離をもっと近づけたいと思います。

人間科学部 4年 倉持恵さん

活発な児童のサポートに入り、いろいろ考えさせられながら対応することが多かったのですが、ここでの活動が教育実習に大変役立ちました。自分が心を開くだけではなく、児童の心に注目していく大切さを学びました。

白幡小学校

外国語学部 2年 桐戸志帆さん

「なかよし英語教室」で、多くの児童から英語が楽しいと言ってもらえる様に心がけました。児童が積極的に手を挙げてくれる時が嬉しいです。自身も前向きに意見を出して教壇に立てる目標に向けて頑張ります。

外国語学部 3年 池田絵美さん

私は小学生が苦手だったのですが、このボランティアを通して子どもたちとスムーズに付き合えるようになりました。今後は活発な子だけでなく、より多くの児童にも関わる様に工夫したいです。

工学部 2年 大野木駿さん

「土曜塾」にて、算数・国語を基本に学校の宿題やドリルなどの補習に関わっています。児童にまんべんなく目を配るように心がけました。低学年の児童は5分~10分で集中力が切れるので、今後は時間配分も考えて取り組んでみようと思っています。

☆ JYSPスタッフ ☆

卒業 鈴木和佳さん



JYSPでは、「外国につながる子どもたちの支援」を担当し、また、英語科ATとして神奈川中学校に携わりました。JYSPでの活動の中で「JINDAIのびのび学習塾」を企画して実現するまでは、初めてのことで大変でしたが、なんとか無事にスタートすることができました。ここでの活動は、教職を目指す私にとって、とても良い経験になり、この春から教壇に立つことができます!! 9月末からの半年間という大変短い間でしたが、先生方をはじめとするスタッフのみなさん、そして学生のみなさん、ありがとうございました。ひとまわり成長してまた遊びにきます♪

歓迎! 新スタッフ 4名

左: 久保山さん 学生の皆さんの活動は、私が、今まで関わったことのなかったことばかりで、とても新鮮な気持ちです。ボランティア活動について勉強しながら皆様のお役に立てる様、頑張ります。

中: 伊藤さん 教職を目指す学生の皆さんと活動を共にしながら、初心に立ち返る大切さを感じています。JYSPでの活動を通して、共に育ち合える環境を皆で作っていかれたら嬉しく思います。

右: 長岡さん JYSPの活動に励む学生の姿から、日々エネルギーをもらってます。学ばなければならないことは、まだまだたくさんありますが、活動をしっかりサポートしていけるよう、多くのことを吸収し自身も成長していきたいと思っています。



<アドバイザー: 横田さん> 毎週月・水・金 13:30 ~ 17:00

元小学校教員の現場経験をいかし、皆さんのボランティアの活動を総合的にサポートします。

JYSP事務局

【場所】横浜キャンパス19号館217号室
【TEL】045-481-5661 (内:4433)

【開室時間】10:00 ~ 18:00 (平日) *土日祝は閉室
【E-MAIL】jysp-2010@kanagawa-u.ac.jp



資料④-4

JYSP BULLETIN

第4号
2011.7.1
発行

神奈川区役所と連携推進協定を締結！



2011年4月26日(火) 学校法人神奈川大学と横浜市神奈川区役所は「地域における大学等教育活動の発展と、安心と活力のある地域社会の形成に寄与すること」を目的として、相互の協力および連携に関する協定を提携しました。

詳細は、大学 HP プレスリリースに掲載しています。
<http://www.kanagawa-u.ac.jp/pressrelease/2011/>

◀右：神奈川区 岡田優子区長
左：神奈川大学 中島三千男学長

続！「JINDAIのびのび楽習塾」外国につながる子どもたちの支援プロジェクト

2011年1月からスタートした「JINDAIのびのび楽習塾」は、現在、小学校から大人(保護者)までの10名が学習言語の修得や日本語などを楽習しています。

開講 6月25日(土)
予定 7月9日(土)、23日(土)

『JYSP 2年目の展望』

人間科学部 教授 入江 直子

昨年8月にスタートしたJYSPは、年度が変わり2年目を迎えました。JYSPを始めるにあたっては、以前からすすめてきた「学校ボランティア」を中心に、新たに「外国につながる子どもたち」の支援と「青少年の居場所」の活動を目標に掲げました。

JYSP部隊は、教職課程を履修している2年生～4年生(「教職浪人」の卒業生を含む)50名余の学生たち、3名の事務局職員、2名のアドバイザー・スタッフで編成されています。組織的とは言い難い状況ですが、一人ひとりの学生が「自分の持ち場で」一生懸命取り組んでいて、全体として見ると大きなプロジェクトになっています。

「学校ボランティア」は、今年度、神奈川区内では5つの小学校(大口台・白幡・二谷・斎藤分・神橋)と3つの中学校(神奈川・栗田谷・松本)、区外では戸塚中・老松中などで、普通学級や特別支援学級でのAT(アシスタント・ティーチャー)、保健室登校の生徒の支援、土曜補習塾などに関わっています。「外国につながる子どもたち」の支援では、今年1月から隔週土曜日の午前中に大学で開催している「のびのび楽習塾」に、近隣の小中学校(斎藤分小・南神大寺小・栗田谷中・六角橋中など)から子どもたちが通ってきています。「青少年の居場所」の活動では、地区センターで中高生とバンドの練習を一緒にしたり、小学校体育館で地域の子どもから大人までの人たちとフットサルをしたりしています。

こうしてみると、対象地域は大学の近隣に限られていますが、3つの活動目標に向けてすすめてきた取り組みを通して、学生たちは地域の子どもたちに出会い、子どもたちの学習や活動に関わっています。このようなJYSPの活動がベースになって、このたび神奈川大学と神奈川区が「連携推進協定」を締結したことはとてもうれしいことです。

そして、月に1回、学生たちと6名の教職課程の教員が参加してボランティア活動の報告が行われる授業での「活動のふり返し」を通して、学生たちの確かな成長を実感することができます。2年目の今年は、学生たちとともに活動しながらボランティアの授業を運営している「教職浪人」の卒業生4人がいます。その取り組みがどのような動きを生み出すか楽しみです。

横浜市立
白幡小学校

経済学科4年 宮本 薫裕さん

照れくさそうな表情を見せながらも、子どもたちの話になると笑顔で楽しそうに話してくれました！



Q: 活動内容を教えてください。

A: 毎週金曜日8:00～15:00に、白幡小学校の特別支援学級で子どもたちの自立を支援するため、一緒に遊んだり、学習サポートをしています。

Q: 活動をして初めての感想は？

A: 子どもたちに教えたことができるようになったときが一番嬉しくて、やりがいを感じます。

Q: 宮本さんの今後については？

A: 卒業するまでこの活動をして、早く教員になれるように頑張ります。



「子どもの未来への夢を育む 地域コミュニティの実現」

横浜市立白幡小学校 校長 永池 啓子

3月11日東日本大震災は、未曾有の被害をもたらしました。改めて、人は、自然によって生かされていること、人は、支え合って生きていることを学んでいます。そのような中、被災地からは「地域コミュニティが、一つの大きな“家族”であること」を、私たちの目に見える形で示してもらっているように思われます。

国民の一人ひとりが、今、自分ができることを精一杯考え、心を尽くすことが、被災地の、そして、日本の復興に繋がると受け止めています。白幡小学校が目指したいことは、これからの日本の未来を築いていく子どもたち“どの子にも学力を付けること”です。また、“子どもが未来へ夢を育む学校、白幡小コミュニティの実現”は、2020年までを一区切りとする長期の学校経営ビジョンでもあります。

本校では、“どの子も幸せに生き抜いていくための学力を付ける！”を合言葉に、学校の教育活動の充実とともに、家庭学習との接続、そして、地域の学習ボランティアの皆様からは様々な支援をいただいております。その中でも、ここ数年、地域の大学である神奈川大学からの支援、並びに協働の事業が、年々充実してきて有難い限りです。例えば、平日のAT(アシスタントティーチャー)、土曜塾「読み書き算」や「なかよし英語」等、大勢の神奈川大学の学生さんや先生方からのサポートをいただいております。

このような中、神大の学生さんたちの中から“教師を目指す人”や“教育関係に携わりたい人”が次々に生まれてきていることも嬉しいことです。一方、学校は、夢の実現を目指す若者たちから大きな活力を得ています。また、昨年度から始まったサマースクールは、正しく、子どもを中心とした「地域コミュニティ＝“家族”」の一つの実現でした。困難を乗り越え、人が支え合う心の源は、ここにあるように思われます。

活動
フォトグラフ



6月2日 ドッチボール大会補助



6月11日 勉強会

お知らせ

大学ホームページの教職課程サイトがリニューアル、JYSPのページができました！ http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher_training_course/jysp/

JYSP事務局

【場所】横浜キャンパス19号館217号室
【TEL】045-481-5661 (内:4433)

【開室時間】10:00～18:00(平日) *土日祝は閉室
【E-MAIL】jysp-2010@kanagawa-u.ac.jp



資料④-5

第5号
2011.10.1
発行

JYSP BULLETIN

横浜市長と JYSP メンバーが「ぬくもりトーク」



2011年7月19日(火) 横浜キャンパスにおいて、「ぬくもりトーク」が行われ、林文字横浜市長とJYSPメンバーが「ボランティア活動を通しての学び」をテーマに意見交換を行いました。

市長からは、「ICT(情報通信技術)の時代で、人と人の関係が希薄になってしまった今、このように愛を持って常に人と触れ合っている方々がいらっしやるのがとてもうれしく、ありがたく思います。」とのお言葉をいただきました。

～「ぬくもりトーク」を終えて～

外国語学部3年 伊賀 林太郎さん



私は、学校ボランティアを通じて自己成長を実感することができています。

子どもたちとの関わりの中で、自分は将来教師になったら、どのように指導していくかという教師観を持てる大切な学びの場でもあります。「ぬくもりトーク」では、自分の活動から得た学びと教師への強い想いを発表させて頂きました。普段は人前に出て話すことは苦手ですが、多くの子どもたちと接してきたために殻を破ることができました。経験は何事も自分を大きく変えてくれます。

自分を高めるために、勇気を持って一歩前に踏み出していきたいです。

～「青少年の居場所」プロジェクトからの報告～

JYSP スタッフ 小畑 慎司



青少年の居場所プロジェクトで大学近くの中丸小学校体育館で行われるフットサルに週1回とある小学生と一緒に参加をしています。その小学生は、「JINDAIのびのび楽習塾」に通い始めた中国籍の男の子で、両親の帰宅が遅く、1人で留守番をすることが多かったため、フットサルへの参加を勧めました。今では、毎週金曜日に一緒に反町駅から中丸小学校へ行っています。

最初は言葉も少なく、バスでの移動中もただ黙って座っていて、また、フットサルでもゲームに参加することはあまりありませんでした。しかし、回数を重ねていくうちに、バスの行き帰りでは、積極的に話をするようになり、外の風景に興味を持ったり、乗り方や降り方を覚えようとする等、色々なことに興味・関心を示すようになりました。今ではフットサルで得点をすることもあります。



彼の通っている小学校や「JINDAIのびのび楽習塾」でも日に日に生き生きと活発になっているそうです。私は、JYSPの活動に参加した彼の大きな変化をみて、大きく成長をしていることを実感しています

詳細はこちらで紹介しています

神奈川大学 http://www.kanagawa-u.ac.jp/teacher_training_course/2011/07/20/003307/
横浜市市民局 <http://www.city.yokohama.lg.jp/shimin/kochosodan/kocho/nukumori/23/0719.html>

地域 密着

7/1(日) アメリカンフットボール部 Atoms in 神橋小学校



大学近隣の横浜市立神橋小学校に、関東1部リーグに所属する本学のアメリカンフットボール部Atomsが登場しました。

早朝からの厳しい暑さにも関わらず、激しいタックルや迫力のあるプレーに子どもたちは真剣な眼差し、後半には大きな選手を相手に「フラッグフットボール」を体験するなど、明るく楽しそうな子どもたちの様子を見ることができました。



8/1(月)~3日(水) 神中ブロック「サマースクール」

神奈川中、白幡小、大口台小



大口台小学校では、「ウキウキカヤック教室」が開催されました。子どもたちは仲間とパディを組み、カヤックに乗ることから始め、最後にはレースで盛り上がりました。

仲間と助け合い、転覆したカヤックを起こしたり、夢中でパドルを操作する姿は、とても勇ましかったです。

8/27(日) 第31回 片倉台団地夏まつり

人間科学部2年 長谷川文哉さん



週に1回、神大寺地区センターの「青少年の居場所」で中高生とバンド練習を行っています。

夏祭りのバンド披露は、アンコールも起こるくらい盛り上がり、大成功でした。今までで一番の演奏ができた女子中学生たちの笑顔が、何よりも嬉しかったです。

8/24(水) デイキャンプ



のびのび楽習塾のこどもたち8人が参加しました。



お知らせ

☆ 「JINDAI のびのび楽習塾」 開講予定 (毎月第1・3土曜日 9:30~12:00、横浜キャンパス内)

2011年10月1日(土)、15日(土) 2012年1月7日(土)、21日(土)

11月5日(土)、19日(土) 2月4日(土)、18日(土)

12月3日(土)、17日(土) 3月3日(土)、17日(土)

* 予定が変更になる場合がありますので、詳細はJYSP事務局までお問い合わせ下さい。

☆ ドキュメンタリー映画「マジでガチなボランティア」 上映会・講演会のお知らせ

2011年10月17日(月) 横浜キャンパス内 17:40上映 19:20講演 20:10終了

医学生が海外で行ったボランティア活動を迫ったドキュメンタリー映画を上映し、映画の主人公である石松宏章氏による講演を行います。 *** 観覧希望の方は、JYSP事務局までお問合せ下さい***

JYSP事務局

【場所】横浜キャンパス19号館217号室

【開室時間】10:00~18:00(平日) *土日祝は閉室

【TEL】045-481-5661(内:4433)

【E-MAIL】jyssp-2010@kanagawa-u.ac.jp



資料④-6

第6号
2014.2
発行

JYSP BULLETIN

神大と神奈川区の協働 寄り添い型学習等支援事業

「JIN-KANA学習塾」開講

世界へ、そして未来へ
KU 神奈川大学
人間科学部 教授 入江 直子

横浜キャンパスの教職課程では、2010年度に横浜市こども青少年局の委託事業「困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業」としてJYSP（神大・ユースサポート・プロジェクト）の取り組みを始めました。近隣の小中学校への「学校ボランティア」、土曜日に大学で行う外国籍児童生徒の学習支援「のびのび学習塾」、地区センター等での「青少年の居場所」活動への関わり等に取り組んでいます。さらに昨年8月からは、神奈川区の委託事業として、家庭の経済的な問題や母語が日本語でない等、高校進学に向けて支援を必要とする区内の中学生の学習支援「JIN-KANA学習塾」を始めました。

中学生たちは、神奈川区の紹介により、週2回、夜6:00～8:30に大学の教室に通ってきて、教師をめざしている学生ボランティアと1対1で学習に取り組んでいます。学生たちは、「どう説明したらわかるか」悩みながら準備をし、中学生に一生懸命関わり、わかった時には、我がごとのように一緒に喜んでいきます。そして、ボランティア同士、工夫を共有して進めています。教師をめざすのに「とてもいい学びの場」になっています。

海と緑と丘のまち
神奈川区

横浜市神奈川福祉保健センター 保護課保護係長 大川 昭博

夏休み明けの8月27日よりスタートした、寄り添い型学習等支援事業「JIN-KANA学習塾」は、現在まで15名の申し込みがありました。中学生たちはほとんど休むことなく、楽しく熱心に学習に取り組み、「未来の先生」たちは、ひとりひとりに寄り添い、ていねいに学習支援をしています。利用している中学生の保護者の方々からも感謝のお言葉をいただいております。あらためて、「この事業を始めてよかった」と実感しているところです。

利用にあたっては、区福祉保健センター保護課に申込書を提出していただき、必要性を確認の上、センターが利用承認をすることとしています。マンツーマン体制を維持するため、受験を控えた3年生を優先しておりますが、中3でなくとも必要とする生徒がいれば、生活状況等を勘案の上、利用を検討しています。

生活に困難を抱えながらも高校を目指す中学生たち、そして中学生に寄り添う「未来の先生」たちを、神奈川区も全力で応援していきます。

JIN-KANA 学習塾の塾生より



Kさん

最初に前回やった問題の復習をしてくれるので、忘れないでおくことができうれしい。わからない問題があったら基本に戻って説明してくれるのでとてもわかりやすい。また、プリントが終わると褒めてくれるので、毎回楽しんで勉強しています。



Eさん

数学も英語も少しずつわかるようになってきた。文章題はやっぱり難しいからいろいろ練習したい。英語は楽しい。ちゃんと学校の授業に出れるようになれるかな。



Tさん

今日は英語で先週やったところのテストをやったけれどケアレスミスが多くてたいへん。数学は一次関数をやった。今度は社会を教えてください。



Yさん

関数はとっても難しいです。文の意味が理解できません。でも英語はテストで満点取れました。次は数学のテストがあるので満点目指してガンバリマッスル。

JYSP 活動報告

学生たちにレポートしてもらいました!

JINDAI のびのび楽習塾

毎週土曜日の午前中に教員を目指す学生たちが、母語が外国語の小・中学生たちに日本語の勉強や学校の宿題・授業でわからないところを、個別に楽しく支援しています。



工学部 3年
勝俣 恵梨奈さん

のびのび楽習塾では、子どもたちが勉強の後に日記の発表をしています。それは、母語が外国語の子どもたちに読み書きの力をつけるためです。最初のころは、文章が短かったり、声がかさかったりしましたが、一緒に勉強していくうちに、子どもたちは自信を持ち、日記の発表にも積極的にようになっていく姿を見ることができました。

人に教えるということはとても難しいと感じていますが、子どもたちの喜ぶ顔を見ると、このボランティアに参加して良かったと思います。



青少年の居場所支援

「青少年の居場所」とは、活動を通じて青少年の主体性と人間関係を培う場所のことです。毎週月曜日には神大寺地区センターでのバンド活動、火・金曜日には中丸小学校でフットサルを行っています。



経済学部 3年
阿部 由希さん

私はフットサルに参加しており、6つのクラブチームに所属する5校の小学生、3校の中学生、高校生、地域の方、外国籍の方、ハンディを抱えた方、教員など様々な人たちとコミュニケーションをとりながら、楽しく活動しています。これからも子どもたちとの交流を通してその成長を支援しつつ、自分も共に成長していきたいと考えています。



学校ボランティア

横浜キャンパスでは76名の学生が近隣の小・中学校（14校）でボランティア活動をしています。平成25年度に実施された教員採用試験の合格者29名（横浜キャンパス）のうち、その多くが学校ボランティアを経験しています。



経済学部 4年 渡辺 定智さん

松本中学校でのボランティアを通して、多くの個性豊かな生徒たちに出会うことができました。授業の場面では、先生方の姿勢や取り組みが生徒たちの学びを支えていることを痛感させられています。吹奏楽部でのボランティアは3年目になり、楽器を覚えてから先輩に頼りきりだった最初の一年生が、今では立派な最上級生で、その成長に驚くことが増えてきました。教師になる前に、生徒たちの一瞬一瞬に加え、時を経た成長に立ち会えたことは、私の一生の財産であると確信しています。



法学部 4年 吉田 絵理子さん

私は2年間、大口台小学校でボランティア活動を行いました。授業中に困っている様子の子に声をかけたり、一緒に遊んだりしました。子どもたちと関わる中で、「子どもの頑張る姿を見ることの嬉しさ」や、「子どもと関わることの楽しさ」を強く感じ、教師になりたいという想いを強く持ちました。その想いは教員採用試験の2次試験を受けるにあたっての自信につながったと感じます。

活動の中で得たこの気持ちは、教師になってからも大切にしていきたいと考えています。

JYSP事務局

学校ボランティアに関する問合せや活動中の様々な相談等を受けております。

【場所】横浜キャンパス17号館21号室

【開室時間】9:00～18:30(平日)/9:00～16:30(土曜日) *日曜・祝日は閉室

【TEL】045-481-5661(内:4228)

【E-MAIL】jyjp-jimukyoku@kanagawa-u.ac.jp



KANAGAWA UNIVERSITY